

ポスト・アンコール期遺跡に関する
研究報告書

奈良文化財研究所

2015

目次

第1部 クラン・コー遺跡調査報告

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の概要	2

第2章 遺構

第1節 調査地点の概要	5
第2節 第4地区の遺構	6
第3節 第6地区の遺構	7
第4節 第7地区・第8地区の遺構	8
第5節 学校地区の遺構	9

第3章 遺物

第1節 1号墓出土遺物	14
第2節 2号墓出土遺物	17
第3節 学校地区Cトレンチ出土遺物	19
第4節 第4・6・7地区表面採集遺物	21

第2部 ロンヴェーク遺跡の調査報告

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯	25
第2節 調査の概要	25

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地	27
第2節 ロンヴェークの歴史的背景	27
第3節 遺構	28
第4節 出土遺物	31

第3部 論考

第1章 出土陶磁器からみたクラン・コー遺跡とロンヴェーク遺跡	37
第2章 クラン・コー遺跡出土遺物の自然科学的調査および保存処理	40
第3章 クラン・コー遺跡における探査成果	45
第4章 リビング・ヘリテージとしてのロンヴェーク遺跡	51

凡例

1. 本書は文化庁伝統文化課所管、平成 22 年度から 24 年度文化遺産国際貢献事業（文化遺産国際協力拠点交流事業）、カンボジア・ウドン遺跡及びロンヴェック遺跡等の保存に関する拠点交流事業の報告書である。
2. 本書の編集は、奈良文化財研究所企画調整部杉山洋と佐藤由似が、石村智、田代亜紀子や関係する研究員の助言を受け担当した。
3. 第 1 部は第 1 部第 1・2 章、第 3 章第 3 節は杉山が、第 1 部第 3 章第 1・2・4 節と第 2 部は佐藤が主に執筆し、第 3 部は各章頭に執筆者名を表記した。
4. 図版の写真は企画調整部写真室井上直夫、岡田愛（当時）の撮影による。現地の写真は上記担当者の撮影による。

第1部 クラン・コー遺跡調査報告

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯

カンボジアにおいてはアンコール遺跡群の研究が主流を占め、ポスト・アンコール期の研究は等閑視されてきた。また人材養成の主眼がアンコール遺跡群保護であったため、諸外国による人材養成はアンコール遺跡群の保護機関であるアプサラとの共同事業であることが多かった。今回、文化庁文化遺産国際貢献事業（文化遺産国際協力拠点交流事業）の助成を受け、プノンペンの文化芸術省を相手機関として、ポスト・アンコール期王都の研究をおこなった。

今回はポスト・アンコール期の文化遺産の調査をおこなうとともに、文化芸術省所管のプノンペン王立芸術大学の学生や卒業生を主体とした人材養成も合わせておこなう。事業実施に当たってはプノンペン近くのウドンとロンヴェークの両王都遺跡をフィールドとする。なかでも近年発見されたクラン・コー遺跡は残りの良い当該期の墓葬遺跡として注目される。当該遺跡を対象として、遺跡探査、遺跡調査、展示公開の3点を中心に、調査と人材養成をおこなった。

2010年1月にプノンペンのカンボジア王国文化芸術省を訪問した折、クラン・コー村から発見されたいくつかの遺物を見る機会を得た。翌日同省官房長ウク・ソチアット氏の同道を得て、本遺跡を訪ねることができた。本村の周囲に点在する遺跡の存在を確認するとともに、そこから出土した遺物の多くを村民からのご協力で見ることができた。ただ本遺跡が盗掘による発見ということもあり、至急に遺跡の広がりや状況を把握して、遺跡保護の指針を得る必要性が議論された。

さらに今回の拠点交流事業の実施に当たっては、当初目的としたポスト・アンコール期の王都であるウドン・ロンヴェークだけでなく、遺跡の重要性・緊急性に鑑み、クラン・コー遺跡も同時に調査をおこなうこととした。



第1図 文化芸術省大臣の視察



第2図 官房長ウク・ソチアット氏との打ち合わせ



第3図 クラン・コー遺跡の遺物散布状況



第4図 クラン・コー遺跡盗掘跡

第2節 調査の概要

第1次調査

平成22年11月27日から12月4日まで第4地区と第6地区で探査と発掘調査をおこなった。

2カ所で物理探査をおこない、それぞれ良好な結果を得た。下記に探査成果の解析結果を記す。第4地区では所々に小形の反応があり、火葬墓の存在を推定できた。ただ今回の発掘調査では火葬墓は検出できなかった。第6地区では探査地点北側に緩やかに円を描く溝状の反応が得られ、この地点に第1トレンチを設定した。しかしこの反応は土中のマンガンを堆積の反応であることが判明し、顕著な遺構は検出できなかった。探査地点南辺ではまとまった反応が得られ、周囲に盗掘に伴うレンガが散乱していた。この地点からは次項に述べるような火化地と想定されるレンガ遺構が検出された。

第2次調査

平成23年2月16日から21日まで、第4地区の追加調査をおこなうとともに、第8地区で新たな発掘調査をおこなった。合わせて村人が所蔵していた遺物を借りて実測調査をおこなった。

第4地区では盗掘孔のある2カ所の地点のうち1カ所を選び、盗掘孔を中心にトレンチを設定した。その結果木棺墓と思われる掘方を検出した。そのうちの1基からは墓壙のなかに木棺の痕跡を検出することができた。今回の調査によって、大形の骨蔵器が検出されない墓跡については、木棺墓である可能性が示唆された。

第8地区はこれまでの第4、6、7地区と異なり、集落の中の地点である。村人によれば今回の調査地点のすぐ北からは、クメール陶器黒褐釉四耳壺が出土し、人骨も伴っていたとのことである。今回はその近くの民家近くで調査をおこなった。全体の層位を確認し、墓葬を検出することはできなかったが、調査をすることによって、周辺の表採をおこなうことが可能になったり、周辺村人が集めた表採遺物を調査することが可能になったりと、これまでに出土した遺物群の調査をおこなうことができた。



第5図 地中レーダー探査



第6図 第6地区の発掘調査



第7図 第4地区の発掘調査



第8図 村人所蔵遺物の実測調査

第3次調査

平成23年7月27日から8月9日までクラン・コー遺跡小学校地区とロンヴェーク遺跡において調査をおこなった。各遺跡の広範囲な写真撮影のために日本治水福岡の西田氏によるマルチローターヘリを用いた空中写真撮影をおこなった。クラン・コー遺跡では第7地区と学校地区で地中レーダー探査と空撮をおこなった後、発掘調査をおこなった。学校地区では比較的遺物の出土が多くみられたとともに、墓葬1基を発掘した。ロンヴェーク遺跡でも土塁や堀の様子などを中心に空撮をおこなった。

第4次調査

平成24年2月8日から13日まで現地調査をおこない、2月22日に現地調査の成果をプノンペン文化芸術省で発表した。第3次調査において学校地区で墓葬が発見されたため、その周辺でのさらなる調査のために、第3次調査第1号墓の西側にトレンチを設定するとともに、墓葬1基を検出した。土師質土器の出土が多く見られた墓葬区の東側に長さ15mのトレンチを設定した。

第5次調査

平成24年8月12日から19日まで第5次調査をおこなった。第3次・第4次発掘調査において、1号墓、2号墓が発見されたことを受け、本次調査では更なる墓葬の有無を確認するため先回までの発掘区域に近接した位置にトレンチを4カ所設定した。今回設定した4カ所のトレンチから墓葬は確認されることはなく、土器片の厚い堆積層が確認された。土器堆積層は地表面約20cmから100cmにかけて堆積しており、出土した土器片はいずれも在地産のものであると判断された。また、土器堆積層の中から土器製作に用いる当て具が25点、陶製腕輪片が59点、石製腕輪片が4点出土した。

今回発見された土器堆積層内から、シーサッチャナライ窯産製と思われる青磁片が出土しており、15世紀中頃から後半の製品と考えられる。1号墓からも同時代のシーサッチャナライ青磁が副葬品として埋納されていたことを考えると、今回検出された土器堆積層も、墓葬とほぼ同時代と考えられる。

今回の発掘調査から、1号墓、2号墓の周辺には厚い土器堆積層が存在していることが判明した。出土輸入陶磁器の年代観から墓葬2基と土器堆積層は15世紀中頃から後半ないし、16世紀初頭に属すると推定される。



第9図 学校地区空中写真



第10図 学校地区から第4・6・7地区をのぞむ



第11図 村人への説明会



第12図 学校地区での探査風景



第13図 学校地区 第1号墓の発掘



第14図 プノンペンにおける成果報告会



第15図 学校地区 2号墓調査風景1



第16図 学校地区 2号墓調査風景2

クラン・コー遺跡、ロンヴェーク遺跡調査参加者

(所属は当時)

杉山洋 (企画調整部国際遺跡研究室)

小澤毅 (埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室)

金田明大 (埋蔵文化財センター)

石村智 (企画調整部国際遺跡研究室)

田代亜紀子 (企画調整部国際遺跡研究室)

佐藤由似 (企画調整部国際遺跡研究室)

西村康 (ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所所長)

西田健典 (日本治水福岡)

Lam Sopheak (奈良文化財研究所現地事務所)

Loeung Ravvattey (奈良文化財研究所現地事務所)

Sok Keo Sovannara (奈良文化財研究所現地事務所)

Ouk Socheat (カンボジア文化芸術省)

Heng Sophady (カンボジア文化芸術省)

Heng Kimson (カンボジア文化芸術省)

Pen Phiwath (カンボジア文化芸術省)

Chea Sopheary (カンボジア文化芸術省)

Ros Sythoun (カンボジア文化芸術省)

Ouk Sokha (カンボジア文化芸術省)

Sar Sovan (カンボジア文化芸術省)

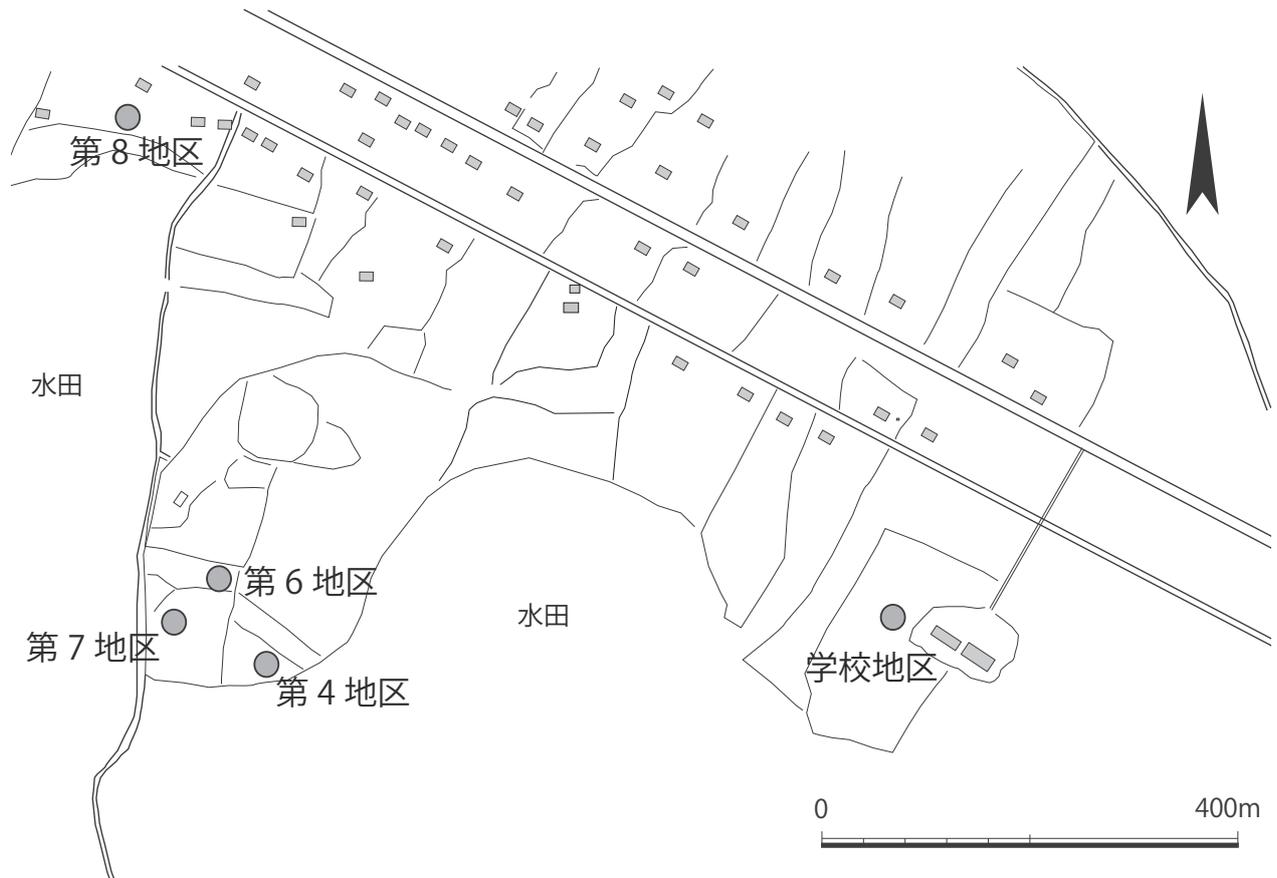
プノンペン王立芸術大学考古学部学生

第2章 遺構

第1節 調査地点の概要

調査に際してはまず文化芸術省にもたらされた盗掘の情報から、平成22年1月に現地を踏査し、おもに盗掘によって荒らされ、陶磁器片が地上に散乱している地点を中心に、第1から第8まで8地区に分け、地上に散乱している遺物の表採調査と地形の観察をおこなった。その結果、特に遺物の出土が多く、地形的にも調査に適した第4、第6、第7、第8地区で発掘調査をおこなった。特に第6地区と第7地区では発掘調査に先立って地中レーダーによる探査をおこなった。

さらに地元での聞き取り調査によって、各地区の東側の小学校でもかつて黒褐釉甕が出土したことが知られ、そこを学校地区として地中レーダー探査と発掘調査をおこなった。各地区の位置は第17図の通りである。



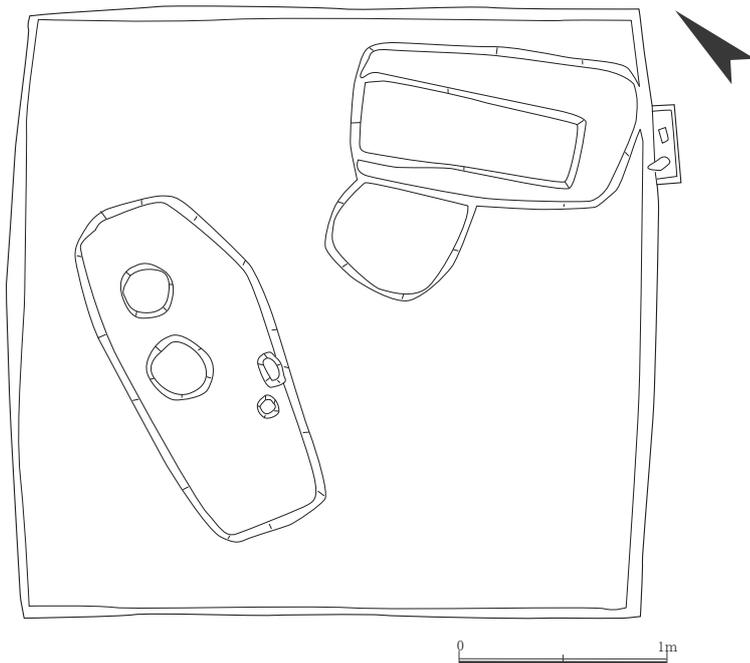
第17図 クラン・コー遺跡全体図

第2節 第4地区の遺構

第4地区では南側の道路の近くに集中して盗掘が行われ、多くの陶磁器が散乱していた。これらは木棺墓等への副葬土器と推定されたため、周辺の盗掘孔を中心として調査区を設定した。その結果3m×3mのトレンチ内から2基の墓葬が検出された。すでに激しく盗掘を受けていたため遺物はほとんど出土しなかった。墓葬1は長軸1.32m、短軸0.78mで方位は北北東—南南西方向を示す。墓壙内では木棺の痕跡が確認され、長軸1.10m、短軸0.40mを測る。墓葬2は長軸1.74m、短軸0.82mで方位は北北西—南南東方向を示す。墓葬1は木棺墓、墓葬2は盗掘範囲が広く土壙墓なのか木棺墓であったかは不明である。



第18図 第4地区遺構（西から）



第19図 第4地区遺構図

第3節 第6地区の遺構

第6地区では2カ所にトレンチを設定した。第1トレンチでは南北方向の溝が上層で発見されたが、それ以外の顕著な遺構は発見されなかった。

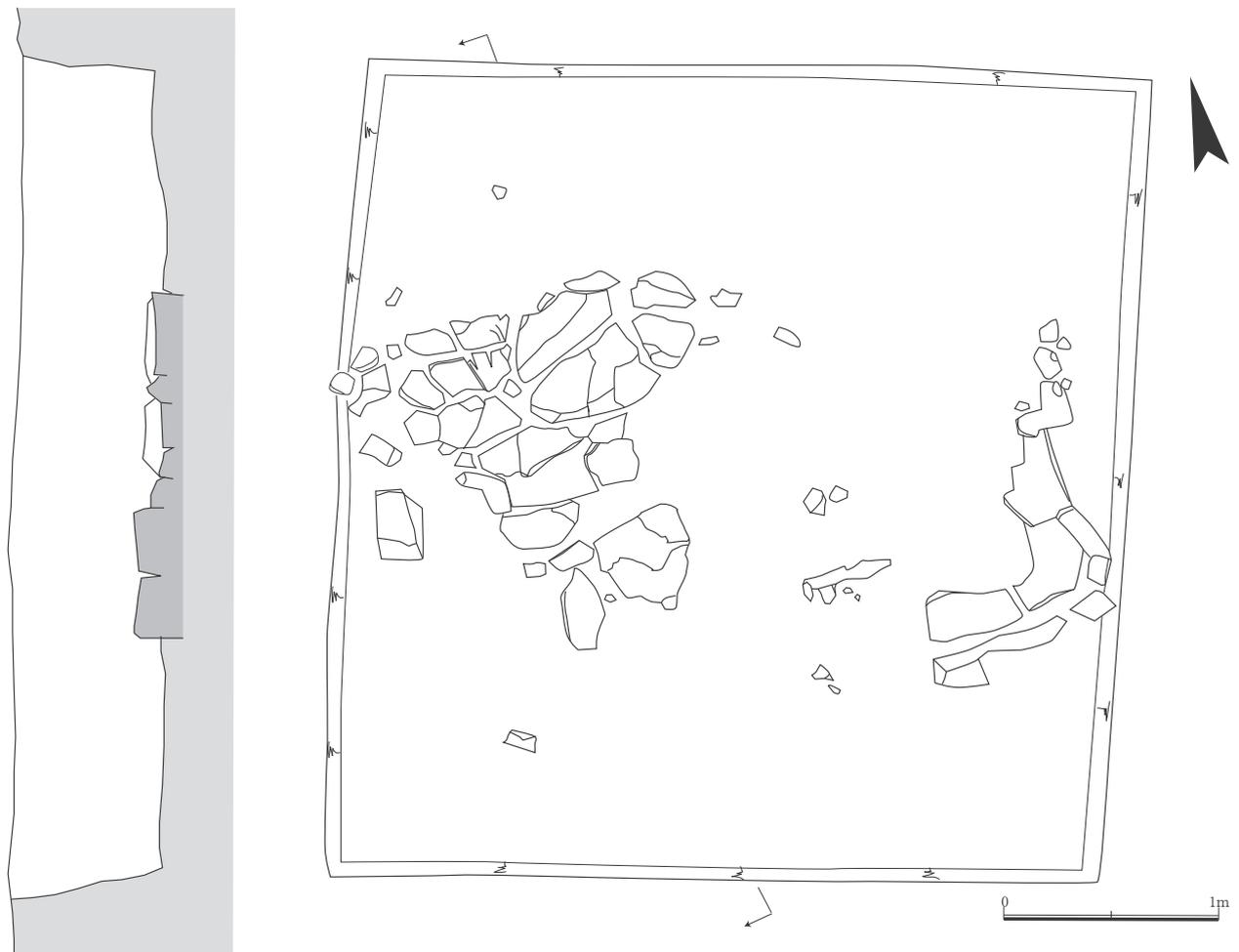
第2トレンチは地上にレンガが散乱しており、建築遺構の存在を予想して発掘をおこなった。その結果、長さ1.5m幅1mにレンガを二段に敷き詰め、その中央に幅27cm深さ6cmの溝を有する遺構を検出した。周辺に焼土が堆積するとともに、レンガ表面が黒く焼けていることが特徴である。周辺が墓域であることを勘案して、溝を通気口とし、レンガ上に遺体ないし棺を安置し火化したものと推定された。ただし今回の一連の調査では火葬墓と推定される遺構は検出されなかった。これまで村人が発見している黒褐釉甕が骨蔵器だとすれば、本遺構を火化地とする蓋然性が高まるものとする。



第20図 第6地区遺構(南から)



第21図 第6地区遺構(北から)

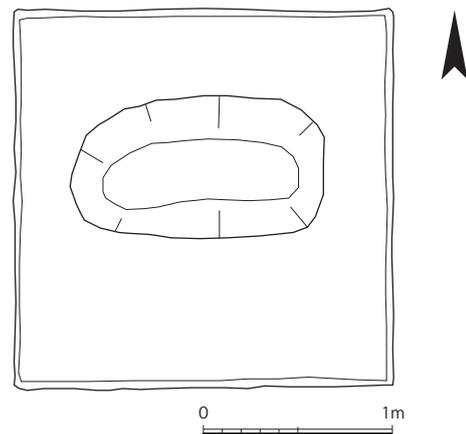
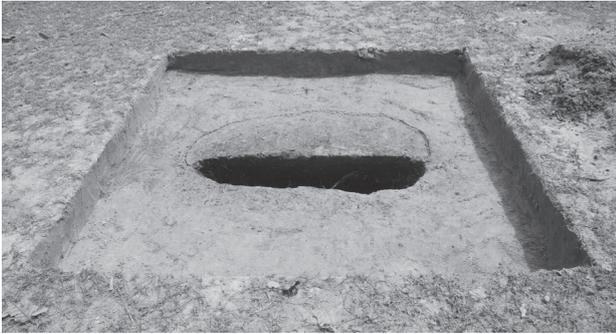


第22図 第6地区遺構図

第4節 第7地区・第8地区の遺構

第7地区でも地中レーダー探査をおこない、反応のあったところに2m×2mのトレンチを設定した。その結果、長径約60cm、短径20cmで炭化物の詰まった楕円形の土壌を検出した。

第8地区はこれまでの第4、6、7地区と異なり、集落の中の地区である。村人によれば今回の調査地区のすぐ北からは、クメール陶器黒褐釉四耳壺が出土し、人骨も伴っていたとのことである。今回はその近くの民家近くで調査をおこなった。全体の層位を確認し、墓葬を検出することはなかったが、調査をすることによって、周辺の表採をおこなうことが可能になったり、周辺村人が集めた表採遺物を調査することが可能になったりと、これまでに出土した遺物群の調査をおこなうことができた。



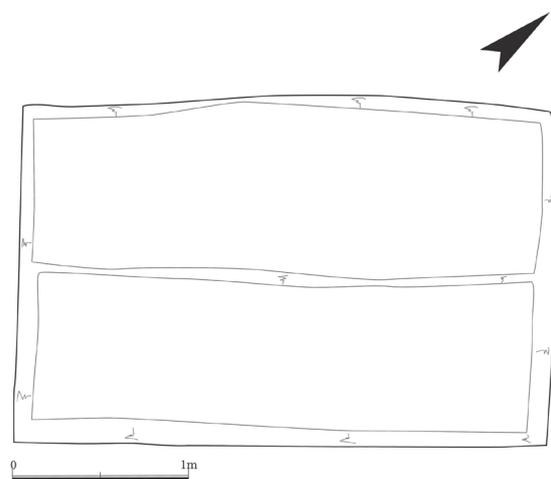
第23図 第7地区 土壌

左上：遺構全景

右上：完掘状況

左下：炭化物の堆積

右下：平面図



第24図 第8地区第1トレンチ

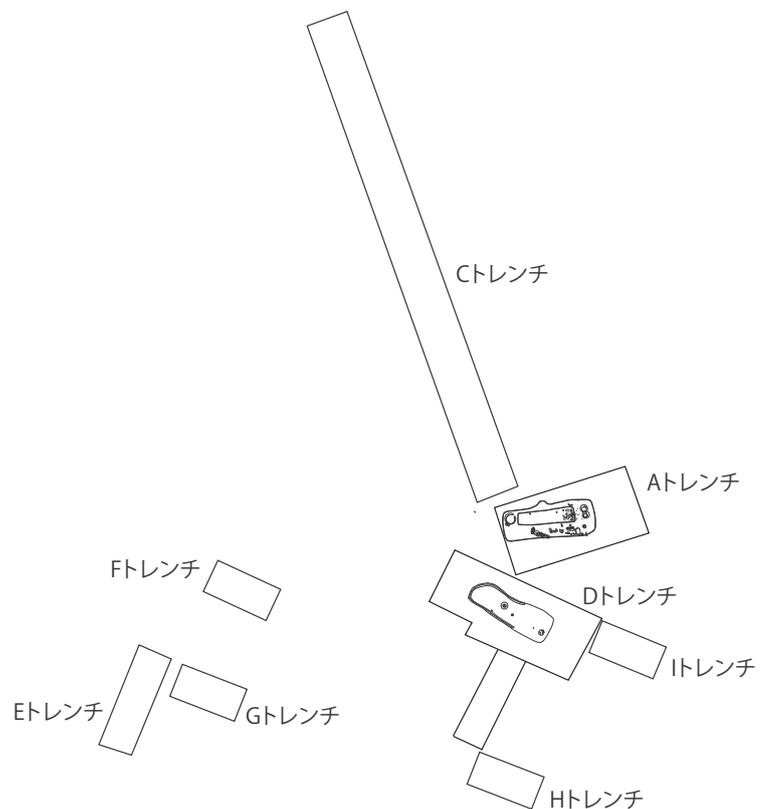
第25図 第8地区第1トレンチ

第5節 学校地区の遺構

トレンチ配置

学校地区では学校関係者から黒褐釉甕が過去に出土したとの情報を得て調査区を設定した。まず学校の西側空地に地形に沿って50m×20mの探査域を設定し、地中レーダー探査を実施した。その結果探査域の南側で反応があり、反応部分を中心に東西4m南北2mのAトレンチを設定した。このトレンチで1号墓が発見されたことにより、その南北に新たなトレンチを設定した。北側には南北に長いCトレンチを設定した。本トレンチは1号墓周辺で他の墓葬を発見することを目的とした。1号墓の南でも南北方向のDトレンチを設定した。同じく墓葬の発見を目的とした。幸いDトレンチで2号墓が発見されたことにより、2号墓完掘のためにDトレンチを東西方向に拡張して発掘をおこなった。

またCトレンチは南北に15m分を設定したが、時間の関係で南北5mごと2カ所のトレンチとして調査をおこなった。南5m分をC1トレンチ、北5m分をC2トレンチとした。



第26図 学校地区トレンチ配置図

1号墓

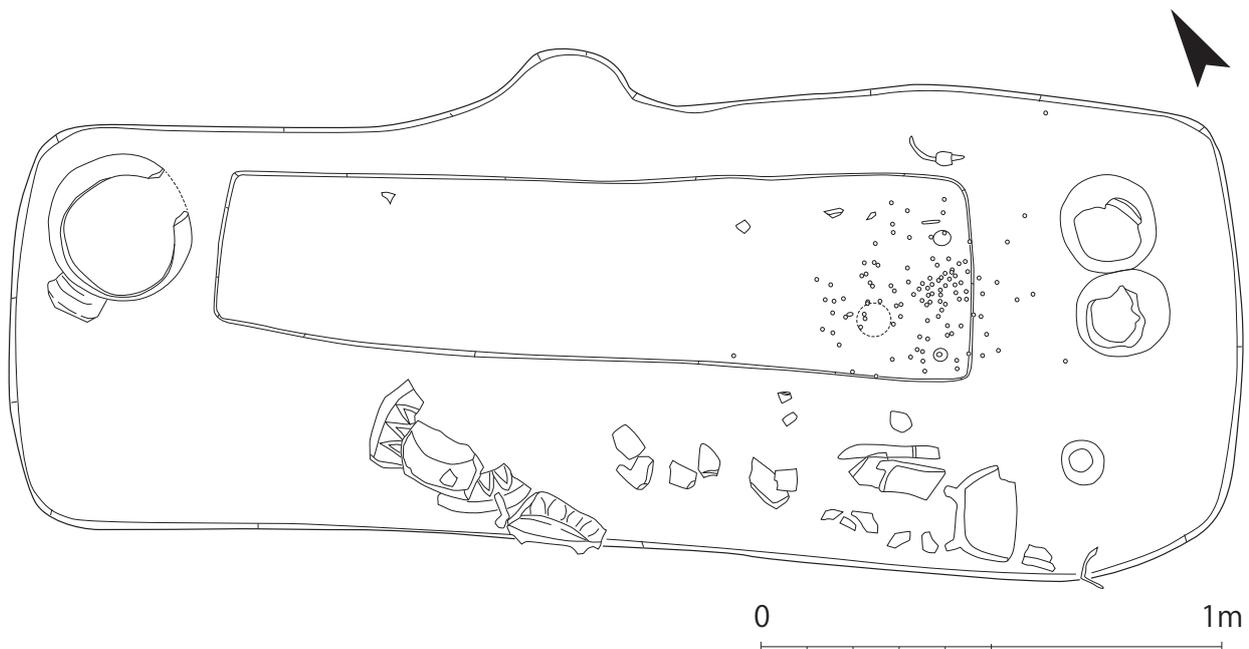
1号墓はトレンチAにおいて地表面より約0.7mの深さから検出された。規模は長軸2.66m、短軸1.20mで、南南東—北北西の方位を示す。墓壙内からは長軸1.64m、短軸0.45mの木棺痕跡が確認され、木棺墓と推定された。人骨は検出されなかったものの、副葬品の配置状況からみて頭位は東南東方向であったと考えられる。

当墓葬からは多様な副葬品が出土した。頭部推定位置の左右それぞれに亜鉛を含む銅合金の耳飾が1個体ずつ配され、頭部から頸部周辺には青色と白色のガラス製小玉が散乱した状態で合計118点が出土した。頭部推定位置の南東側には2個体の在来系土師質丸底甕が並べられ、足元にはそれらよりひとまわり大きな在来系土師質丸底甕1個体が配されていた。両腕推定位置の外側には鉄製小刀が1個体ずつ確認されていた。南側からは輸入陶磁器が集中して検出され、すべて青磁製品であった。確認されたのは、中国青磁輪花皿1点、青磁碗1点、タイ・シーサッチャナライ窯青磁盤1点・鉢1点であったが、完形で出土したのは中国青磁輪花皿1点のみである。その他は破片の状態で異なる位置から検出された。これらの輸入陶磁器の年代観は15世紀中葉から後葉に比定できるものである。当墓壙の被葬者は、墓壙規模からみて成人1名であったと考えられるが、人骨が検出されなかったため、男女の別は不明である。

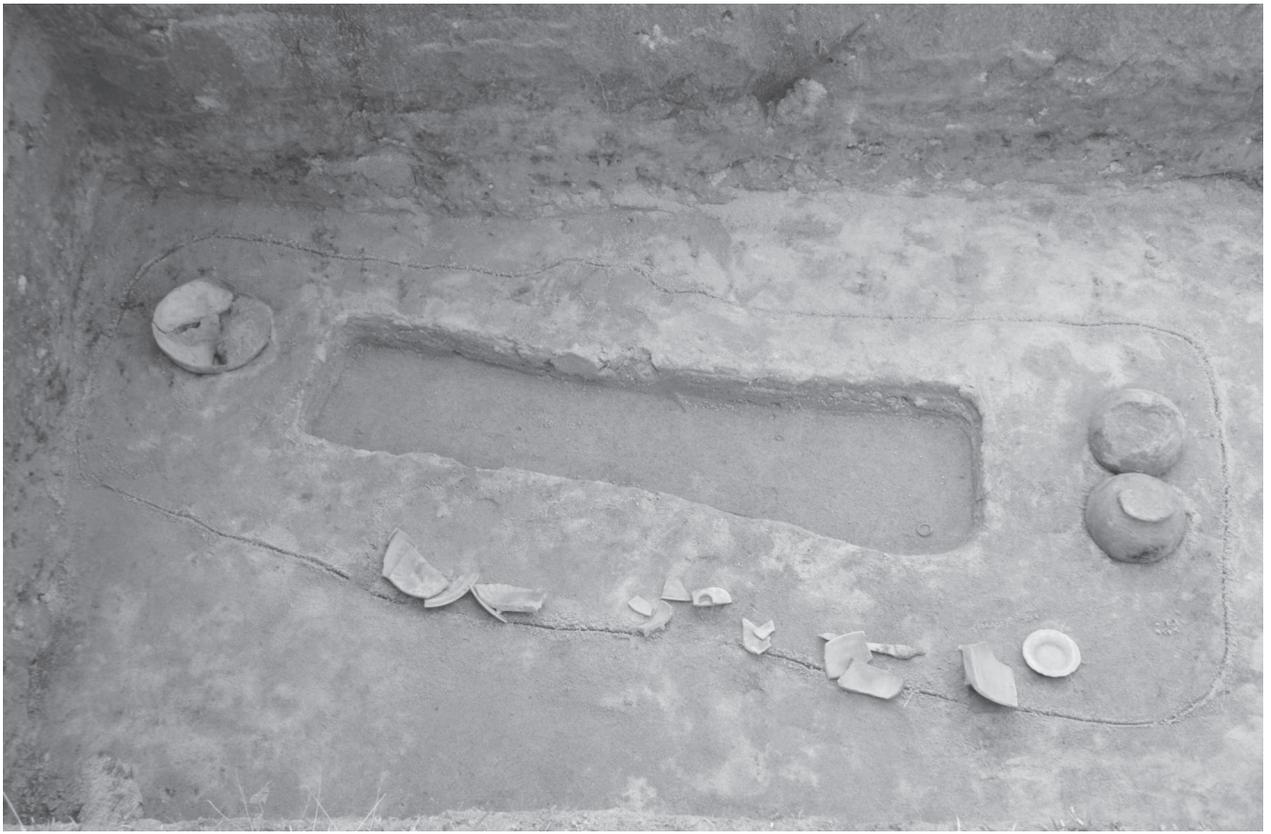
遺構は木棺痕跡とその埋納土壙が検出されたことから、典型的な木棺墓と考えられる。ただ木棺痕跡周辺からは鉄釘等の出土が見られず、くり抜き式あるいは有機質の結合資材を用いた組み合わせ式の木棺であった可能性が高い。また人骨が残っていないことから、埋葬後、人骨を掘り出して二次埋葬をおこなった可能性も考えられるが、少なくとも遺骨を掘り出した時に生じる土壙の痕跡が検出されておらず、一次埋葬地であった可能性を考えておきたい。

遺物は埋葬時の状態をとどめていると思われるが、特に陶磁器類に関しては、中国青磁輪花皿1点だけが完形で、あとの青磁碗1点、タイ・シーサッチャナライ窯青磁盤1点・鉢1点の3点は破片となって棺側に副葬されていた。これら破片となって出土した3点はいずれもほぼ完形に復元され、人為的に破片化して副葬されたと考えられる。また出土した土師質丸底甕3点は頭位2点、足位1点と別置され、それぞれ内容物に差があったと考えられる。

ガラス玉は棺頭位に集中するが、棺外の埋納土壙周辺にも一部存在する。最終埋葬時に棺内の頭部に散布し、一部が棺外に飛散したと推定される。これら副葬品の出土位置と状態から、当時の埋葬習俗をある程度復元する事ができるとともに、各副葬品の時代推定にも良好な一括資料として大いに寄与する所である。



第27図 学校地区1号墓平面図



第 28 図 1 号墓検出状況（南から）



第 29 図 1 号墓検出状況（北西から）

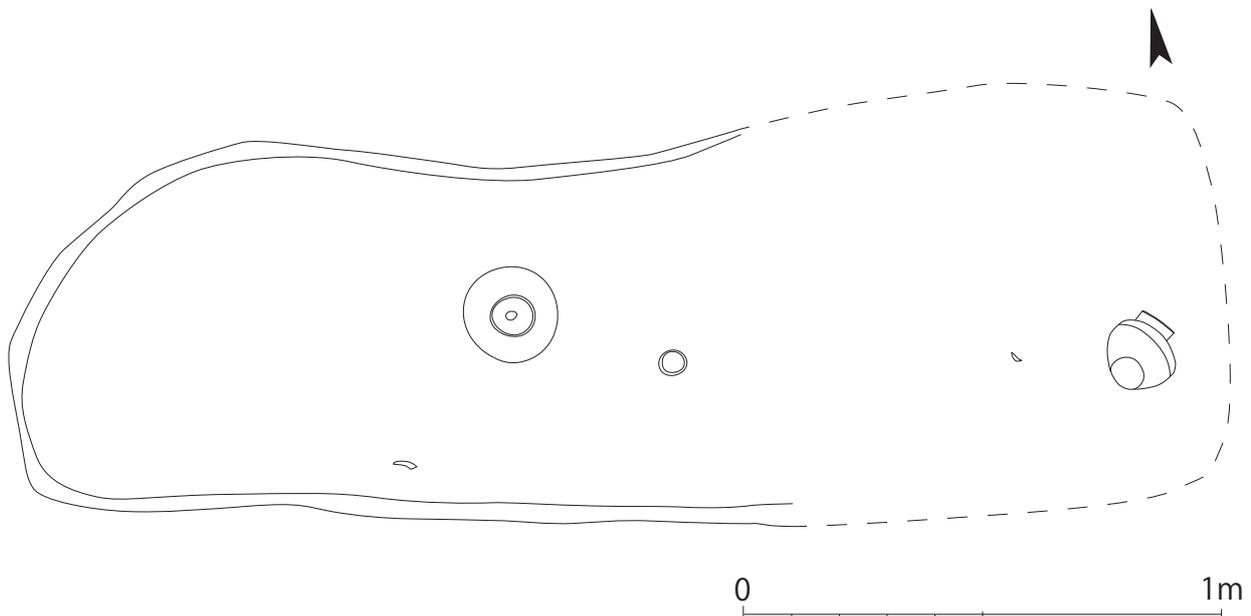
2号墓

2号墓はトレンチDから検出され、規模は長軸2.6m、短軸0.9mの長楕円形を呈し、東南東—西北西の方位を示す。当初トレンチDは東西方向の細長いトレンチを設定して発掘を始めたが、その南寄りでは青花碗が発見されたため、墓葬と推定し、墓壙全体を検出するために南北方向に拡張し、最終的にT字形のトレンチとなった。青花碗周辺では墓壙がはっきりせず、拡張区で輪郭をとらえることができた。ただ墓壙は不整形で1号墓のように木棺と墓壙の区別ができなかった。2号墓は木棺を使用しない土壌への直葬と推定される。また1号墓と同様、人骨も検出されなかった。1号墓とは異なる状態で副葬品が複数出土している。

出土した副葬品は景德鎮窯産青花碗1点、青銅製碗1点、青銅製指輪1点、青銅製腕輪1点、ガラス製小玉7点、在地系土師質丸底甕1点などであった。青花碗は青銅製碗に被さり、2点とも伏せた状態で出土した。青銅製指輪は青銅製碗の中から発見された。またガラス製小玉も周辺から出土したが、1号墓に比べ出土量が少ない。これらは墓壙の東寄りから検出され、一方西寄りからは在地系土師質丸底甕が出土している。1号墓の副葬品配置状況を参考にすると、青花碗、青銅製碗が頭位、土師質丸底甕が足元であると推定される。また墓壙の中心付近からは青銅製腕輪が出土し、被葬者の腕位置にあたと考えられる。

青花碗は内底見込に十字花文様を施したもので年代観は15世後葉から16世紀前葉に比定できると考えられることから、1号墓と2号墓に大きな年代差は認められない。

2号墓は検出面が深く遺構の残りが悪かったため、墓壙痕跡を頭位の一部で検出できていない。また1号墓のように木棺痕跡も確認できておらず、1号墓のような詳しい副葬状況は復元できていない。ただ基本的に頭位に輸入陶磁と青銅製品を置き、ガラス玉を副葬し、足位に土師質丸底甕を置くという基本構成は1号墓に類似する。また1号墓と2号墓は近いところで1.2mほどしか離れておらず、頭位をほぼそろえ東向きとする。一連の墓葬群に属するものと考えられる。人骨は遺存しないが1号墓同様、2号墓でも人骨を取り出した再葬痕跡は確認できず、土壙墓に葬られ、砂質の土壌のために人骨が残らなかったと考えられる。



第30図 2号墓平面図



第 31 図 2号墓青花碗出土状態



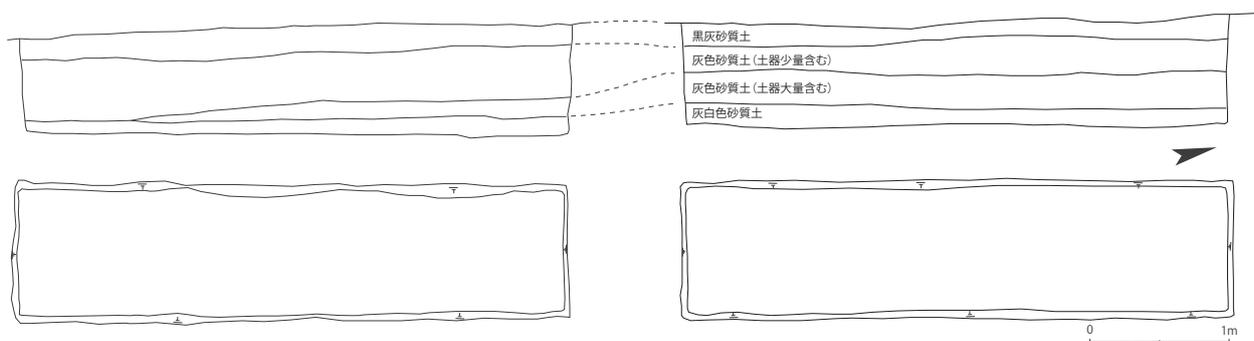
第 32 図 2号墓青銅碗出土状態



第 33 図 2号墓西半部検出状況

C トレンチ

トレンチ C は墓葬群の北側に南北に細長い調査区として設定した。当初は 1 号墓に続く墓葬の検出を目的としたが、墓葬は検出されなかった。しかし緩やかに南に向かって下がる土層から、大量の土師質土器片と石製と陶製の腕輪、タタキ成形時に使用する当て具が大量に出土した。遺構は検出されず、単純な堆積層が南に向かって緩やかに下がっているため、トレンチのさらに北側に土器製作工房が存在し、そこでの不良品や製作道具が廃棄されたと推定される。



第 34 図 C トレンチ平面図・土層図

第3章 遺物

第1節 1号墓出土遺物

1. 中国青磁

中国青磁皿1点(第39図1)、碗1点(第39図2)が確認された。皿は口径12.4cm、器高2.9cm、高台径5.6cmを測り、口縁は輪花状を呈する。完形の状態で出土した。釉は緑灰色で、高台内のみ露胎である。内底見込に文字または記号が表されている。碗は口径14.6cm、器高6.6cm、高台径5.0cmを測る外反碗である。内底には圈線が巡り、中央部はやや膨らみをもつ。釉は緑灰色で高台内まで全面施釉である。

2. タイ青磁

すべて破片の状態で出土したが、盤1点(第39図3)、鉢1点(第39図4)の2個体に復元された。盤は口径26.0cm、器高7.6cm、高台径9.6cmを測る。鏝縁口縁をもち、内底には圈線が巡る。体部内面には蓮弁文と圈線が施され、外面は無文である。釉はオリーブグリーン色で、高台のみ露胎である。また高台内部には径5.5cmの筒型敷柱跡が残る。鉢は口径21.3cm、器高9.9cm、高台径9.0cmを測る。内外面とも口縁部下に二重の圈線がめぐる。釉色は灰緑色で外面体部下端まで施釉される。高台内には径4.3cmの筒型敷柱跡が残る。これらの特徴からタイのシーサッチャナライ青磁に比定可能である。

3. 土師質丸底甕

頭側からの2点はほぼ完形の状態で、足側からの1点は口縁が欠損した状態で出土している。頭側2点のうち、東側の丸底甕(第39図5)は残存高18.5cm、胴部中央付近の最大径22.4cmを測る。外面肩部付近に2条の鋸歯状文が巡っている。外面は横方向に丁寧なナデ、タタキ痕、内面には成型時の手指痕が残る。西側検出の丸底甕(第39図6)は口径14.6cm、器高19.2cm、胴部中央最大径は21.7cmである。外面には横ナデ、内面には手指痕が残るが、剥離が激しく不明瞭である。足側から検出された丸底甕(第39図7)は頭側のものに比べてやや大ぶりな作りで、残存高は19.3cm、胴部中央最大径26.6cmを測る。外面には不定方向のナデ、内面には小さなあて具痕が残る。底部には径1cmほどの焼成前穿孔が見受けられる。



第35図 1号墓出土遺物



第 36 図 1 号墓出土遺物

1. 中国青磁碗、2. タイ青磁碗 3. タイ青磁盤、
 4. 土師質丸底甕、5. 土師質丸底甕、6. 土師質丸底甕
 7. 中国青磁皿

4. 青銅製耳飾

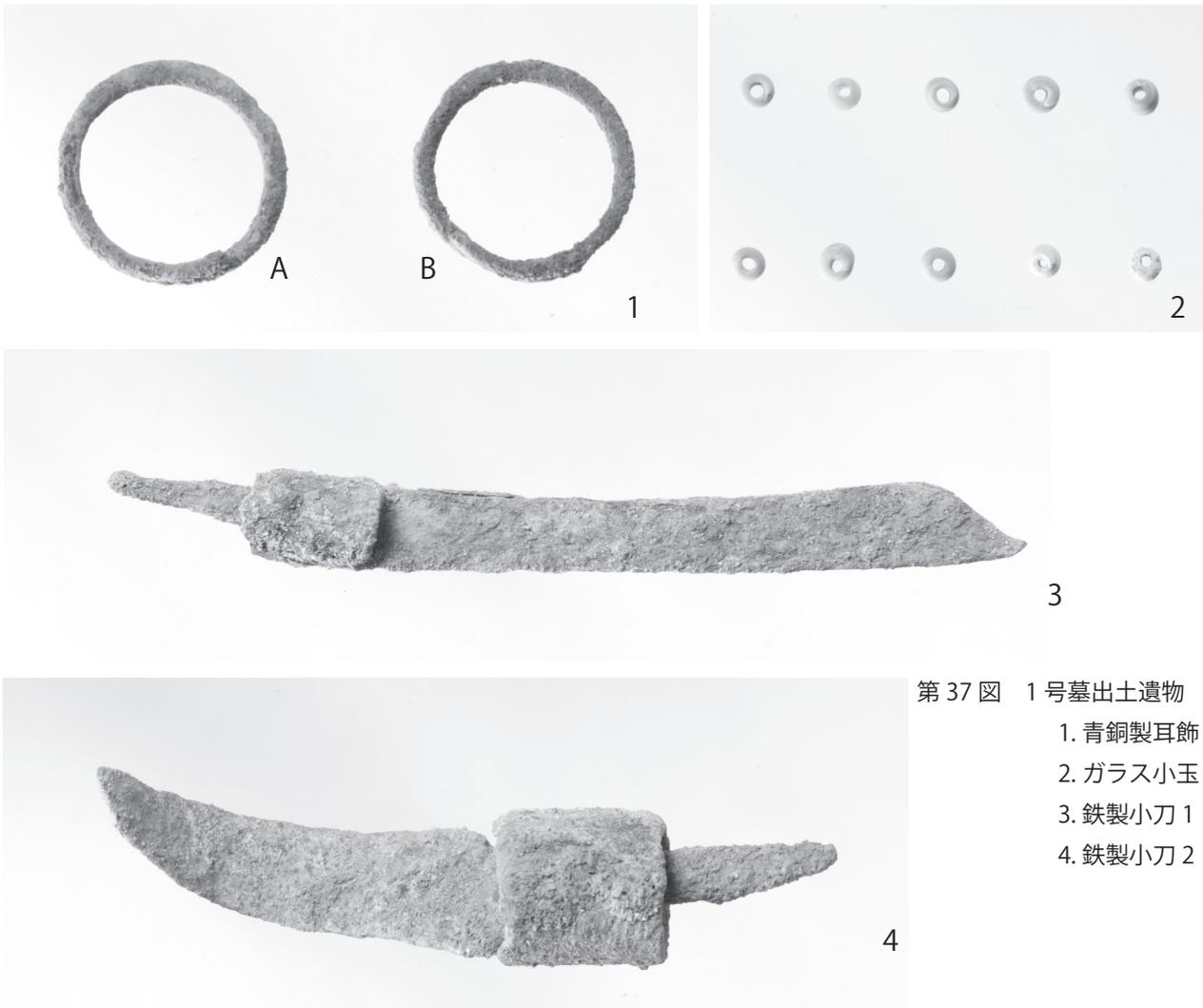
Aは外径3.4cm、内径2.7cm、太さ0.4cm、Bは外径3.3cm、内径2.6cm、太さ0.3cmを測る。いずれも棒状品を丸めて円形に成形したものと思われるが、錆化のため接合部等の観察はできていない。蛍光X線分析で銅を主成分とし、これに亜鉛を混ぜる合金であることがわかった。

5. ガラス小玉

頭部周辺から散乱した状態で合計118点が出土した。小玉は青色(水色)、白色、青色と白色が交互に混ざるタイプの3種類が確認された。点数の分布をみると、青色106点、白色11点、青・白色混在タイプ1点と、圧倒的に青色小玉の量が多い。ほぼ全個体にらせん状の巻き付け痕跡が見受けられた。平均的にみて、どの種類も直径4mmから6mmの範囲におさまる。これらのガラス製小玉はカリ鉛ガラス製で、宋代以降の中国での検出事例が多いタイプであるということが判明している(第3部第3章参照)。

6. 鉄製小刀

木棺痕跡の外側から東西にそれぞれ1点ずつ出土している。西側から検出された小刀は全長25.1cmを測る。現在でも現地で使用している草刈り刀と似た形状をしているがやや小ぶりである。東側から検出された小刀は全長12.8cmを測る。刀身は「く」の字に屈曲しており、陶磁器が破砕されていることを考え合わせると、副葬に当たって人為的に曲げた可能性も考えられる。いずれも細い茎を有し、身と茎の間には筒状の口金物がはめられ、木製柄と茎を締め付けていたものと考えられる。



第37図 1号墓出土遺物

1. 青銅製耳飾
2. ガラス小玉
3. 鉄製小刀1
4. 鉄製小刀2

第2節 2号墓出土遺物

1. 中国青花碗

2号墓東寄りから金属製碗に被さるように出土した。遺物の配置状況から頭部にあたるものと推定される。口径17.6cm、器高7.6cm、高台径7.1cmを測る腰張碗である。外面体部には唐草文様、内面体部には瓔珞文、内底見込には十字花文が施されている。フィリピンのサンタ・クルス沖沈没船(1510年)資料などの中に類例が認められることから、15世紀後葉から16世紀前葉にかけての製品であると考えられる。

2. 青銅製碗

口径12.9cm、底径8.3cm、高さ7.5cm。口縁端部は丸く肥厚するが体部を含め厚さは0.2から0.3mm。比較的錆は少なく全体に黒色を呈す。保存状態の良い内底見込部は黄褐色を呈する。底部見込を除き内外面にロクロ目が残る。蛍光X線分析の結果、銅を主成分とし、これに錫と鉛が加わる青銅製品であることがわかった。

3. 青銅製指輪

外径2.1cm、内径1.7cm、腕輪と同様、棒状品を曲げて円形とする。単純な棒状ではなく、外側に14個の波形を有する。蛍光X線分析の結果、腕輪と似たような結果で、銅を主成分とし、亜鉛と錫を含む合金であることがわかった。

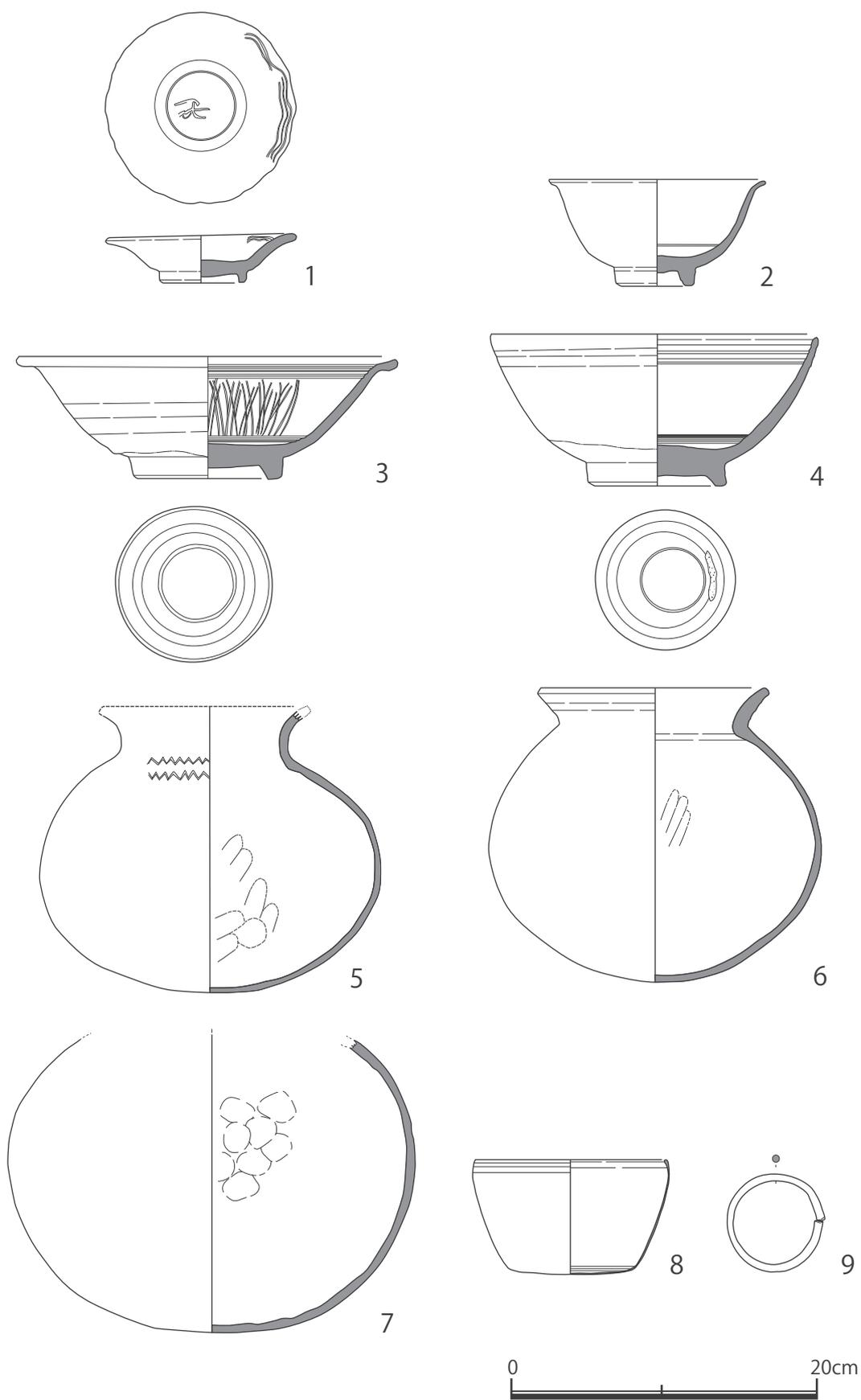
4. 青銅製腕輪

外径6.4cm、内径5.4cm、太さ5mm。断面円形の青銅棒状品を曲げて製作したと見られ、端部の合わせ目はややずれる。成分は指輪と同様。



第38図 2号墓出土遺物

1. 青銅製碗、2. 中国青花碗
3. 青銅製腕輪
4. 青銅製指輪



第39図 1号墓、2号墓出土遺物実測図

1号墓出土遺物：1. 中国青磁皿、2. 中国青磁碗、3. タイ青磁盤、4. タイ青磁碗、
5. 土師質丸底甕、6. 土師質丸底甕、7. 土師質丸底甕

2号墓出土遺物：8. 青銅製碗、9. 青銅製腕輪

第3節 学校地区Cトレンチ出土遺物

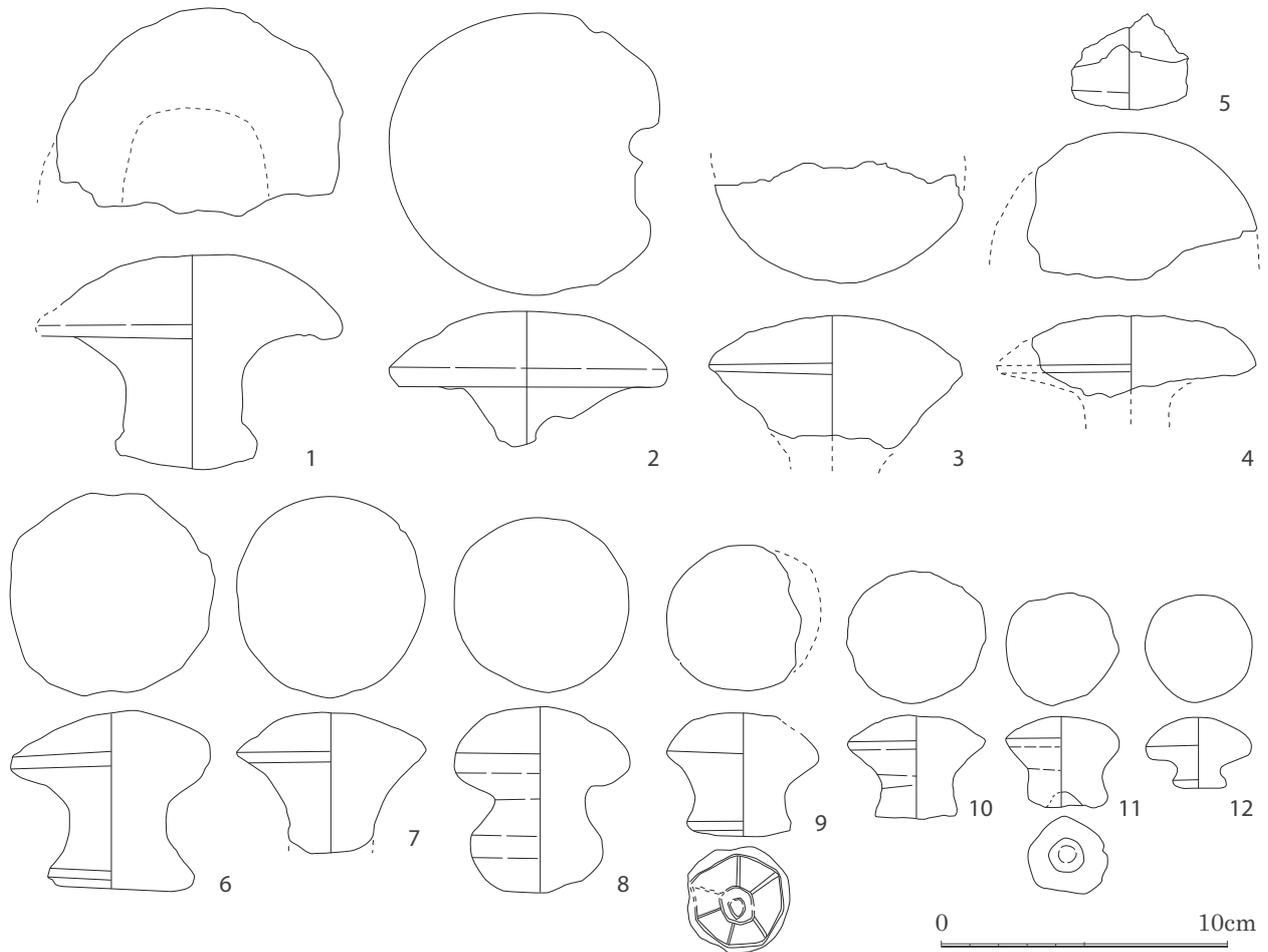
1. 当て具

学校地点では茸形をした当て具が出土した。これらは土師質土器の丸底甕を製作するときに、内面の当て具として使用したと考えられ、破片数にして25点出土した。笠部の大きさによって大中小の3種に分類できる。

大形（第40図1～4）1は笠部径10.5cmを測り、最も大形である。笠部の中央が使用により摩滅するとともに、柄部の端面も摩滅する。2は笠部径9.7cm。3は笠部径9.4cm。4は笠部径9cm。5は大形の柄端部の破片と考えられ、1と同様柄部端面が使用により摩滅する。

中形（第40図6～9）笠部の大きさは6.8cmから5.1cmまで。大形と形態は似るが、柄部端面が平坦になる点の特徴である。ただ8については柄部端面も丸くなり、この部分を当て具として使用している可能性がある。また9は柄部端面に刻文を有する。

小形（第40図11,12）は2点図示した。笠部径は6が3.6cm、7が3.5cmである。6は柄部端面にくぼみを持つ。これら小形品は笠部に使用痕が観察できず、その大きさも非実用的で、実際の当て具として使われたかは疑問がある。



第40図 当て具

2. 腕輪

学校地区の各トレンチから陶製と石製の腕輪が多く出土した。いずれも円形で、多くは陶製であるが、砂岩製の腕輪が4点発見されている。直径による度数分布は下表の通りである。これを見ると直径はかなりのばらつきがあり、直径40mm以下のものは腕輪というより耳飾り等であった可能性が考えられる。墓葬からも青銅製の腕輪と耳飾りが発見されており、腕輪と耳飾りが当該地の主要な装飾品であったと推定できる。

直径	個体数
20mm以下	1
21-30mm	19
31-40mm	20
41-50mm	11
51-60mm	7
61-70mm	3
71mm以上	2

陶製腕輪

番号	大きさ				色	トレンチ	整理番号
	直径(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
1	38	7	6	3	赤色	E	K284
2	38	7	5	4	灰色	F	K383
3	27	8.5	5	2	灰色	F	K395
4	23	14.5	7	4	灰色	F	K495
5	54	11	7	7	灰色	F	K585
6	30	13	5	3	灰色	F	K598
7	39	7	4	3	黒色	F	K978
8	46	10	10	9	灰色	C	K1165
9	47	9	9	6	灰色	C	K1166
10	73	8	8	12	灰色	C	K1167
11	60			6	灰色	C	K1168
12	62			8	灰色	C	K1169
13	72			7	灰色	C	K1170
14	42	8	8	4	灰色	C	K1171
15	45	5	5	3	灰色	C	K1172
16	33	7	7	3	灰色	C	K1240
17	55	9	7	9	灰色	C	K1265
18	32	9	8	4	灰色	C	K1366
19	26.5	9	8	2	灰色	C	K1367
20	32	7	10	3	灰色	C	K1368
21	30	8	8	3	灰色	C	K1370
22	35	7	6	3	灰色	C	K1383
23	26	9	8	3	灰色	C	K1446
24	50	7	7	6	灰色	E	K1564
25	54	8	8	4	灰色	E	K1565
26	21	8	8	2	灰色	D	K1599
27	33	8	8	4	赤色	D	K1668
28	36	13	13	5	灰色	D	K1690
29	36	12	12	5	灰色	Z	K1845
30	50.5	12.5	12.5	8	灰色	D	K1962
31	40	6	6	3	灰色	C	K1963
32	42.5	9	8	4	灰色	C	K1964
33	32	6	8	3	灰色	C	K1965
34	32	6	6	2	灰色	C	K1966
35	36	8	8	4	灰色	C	K1967
36	62			7	灰色	F	K1970
37	49	9	8	6	灰色	F	K1971
38	30	7	8	3	灰色	F	K1972
39	39	5	6	3	赤色	F	K1973
40	29	6	8	3	赤色	F	K1974
41	26	6	6	2	灰色	G	K1979
42	36	10	6	3	赤色	G	K1981
43	23	11	5	3	黄灰色	G	K1984
44	38	9	9	4	灰色	G	K1985
45	40	7	5	3	赤色	G	K1986
46	25	8	5	2	灰色	G	K1987
47	26	7	7	2	灰色	G	K1988
48	38	15	8	6	赤色	G	K1990
49	19	8	4	1	灰色	G	K1991
50	42	8	4	4	灰色	G	K1992
51	41	9	6	4	灰色	G	K1994
52	22	7	5	2	灰色	G	K1996
53	30	5	7	3	灰色	G	K1997
54	24	8	5	2	灰色	G	K1998
55	24	8	7	3	灰色	G	K1999
56	30	8	8	4	灰色	G	K2000
57	45	8	8.5	6	灰色	G	K2001
58	22	5	7.5	2	灰色	G	K2002
59	51	8	9	6	灰色	H	K2004

石製腕輪

1	56	5	5	6	赤色	G	K1980
2	31	7	4	3	灰色	G	K1989
3	51	8	5	6	灰色	G	K1993
4	41	5	3.5	2	灰色	G	K2003



第41図 陶製・石製腕輪

第4節 第4・6・7地区表面採集遺物

表面採集遺物は近年地中から掘り出され、地表に散乱したままの状態で見つかり、今回の調査でそれらの遺物を採集し、基礎的な整理作業をおこなった。表採遺物には墓墳出土遺物よりさらに多様な輸入陶磁器が含まれている。中国製品のみならず、タイ青磁のほかミャンマー青磁やビンディン青磁に加えて在地のクメール黒褐釉陶器も採集することができ、多様な東南アジア産陶磁器を確認している。

以下に、抽出した表採資料の詳細を記す。

1. 中国青花

村内各地点で確認しており、発見されたのはすべて碗で、主に15世紀後半～16世紀前葉にかけての製品であると思われる。中国青花碗1(第42図1)は腰張碗で口径13.2cm、器高6.4cm、高台径5.6cmを測る。内底には十字花文、内面口縁部には梵字文が表されている。外面体部には唐草文、下部には略化した蓮弁文帯が描かれている。中国青花碗2(第42図2)は腰張碗で口径15.0cm、器高6.4cm、高台径6.6cmを測る。内底には松竹山水文が、内面口縁部には四方禪文が施される。外面口縁部には亀甲文帯、体部には松竹山水文が表現されている。

2. タイ青磁

中国青花と同様、村内各地点から多く発見された(第44図1、2)。確認された器種は盤と碗がほとんどである。図6:1は靨縁口縁を持つ青磁盤で口径23.1cm、器高8.2cm、高台径9.2cm。釉色は灰緑色で外面体部下端まで施釉され、高台は露胎である。高台内には径4.8cmの筒型敷柱痕が残る。図6:2は靨縁口縁を持つ盤で、口径22.7cm、器高8.3cm、高台系9.8cmを測る。内面体部には櫛描きによる連続した蓮弁文が施され、外面体部には縦筋文が表される。釉色は灰緑色で、高台のみ露胎である。高台内面には径5.2cmの筒形敷柱跡が確認できる。

3. タイまたはミャンマー白濁釉鉢

白濁釉製品は1点のみの確認で、口径17.6cm、器高10.0cm、高台径8.4cmを測る鉢である(第44図3)。口唇が肥厚した厚手で重量感のある作りである。内底には圈線が巡り、外面体部には縦筋文が施される。厚化粧土の上から釉薬をかけ、釉は光沢のない白濁色に発色する。産地については現状ではタイまたはミャンマーとしたい。

4. ミャンマー青磁

2点がほぼ完形に復元され、いずれも碗である(第44図4、5)。図6-4は口径11.7cm、器高7.2cm、高台径5.0cmを測る。口縁はやや内湾し、内底にはごく浅い圈線が巡る。高台が高めに作り出され、側面を一周削り取り、畳付はやや不整形な作りである。釉色は灰緑色に近く、外面体部下端まで施釉される。15世紀から16世紀にトワンテ周辺で生産されていた青磁製品と共通する特徴をもつことから、生産地を当該地域に比定した。

5. ベトナム中部青磁

ベトナム中部ビンディン青磁が3個体が確認された(第44図6、7)。図6:6は玉縁状の口縁をもった碗で、口径16.3cm、器高6.5cm、高台径5.0cmを測る。内底には輪状釉剥ぎがなされ、内外面ともに無文である。高台側面の表面が一周削り取られており、わずかに段差がつく。釉は薄く体部下端まで施釉されているが剥離が激しい。釉色は黄灰色である。図6:7は口径16.4cm、器高6.4cm、高台系5.2cmを測る碗である。内底には幅広の輪状釉剥ぎがなされ、内外面ともに無文である。釉色はやや光沢のあるオリーブグリーン色で、外面体部中頃までの施釉である。

6. 広東系褐釉四耳壺

第44図8は、口径9.2cm、器高18.2cm、底径10.4cmを測る。胴中央付近に最大径をもち、径19.2cmである。短頸で肩部には4個の耳が横位に貼付される。釉はかせているが、外面体部下半まで施されている。

7. クメール黒褐釉四耳壺

第44図9はクメール黒褐釉四耳壺の破片である。頸部に沈線が巡りその下部に形骸化した耳が横方向に据えられている。肩部には横位に沈線と波状文が施され、以下には縦方向に波状文が施される。釉色は黒褐色で外面全面に施釉される。

8. ミャンマー土師質碗

第44図10は土師質の碗で、高台が外側にやや広がる。口径15.2cm、器高7.7cm、高台8.8cmを測る。ナデ調整されたともみられ、また外面には丹塗りのような朱色が一部に残る。同様の製品がミャンマーのパヤジー窯跡で発見されたという報告がみられるため(富山佐藤記念美術館2004)、今回はミャンマー産と比定した。

参考文献: 富山佐藤記念美術館、『東南アジアの古陶磁(9) - ミャンマーとその周辺 -』、2004



第42図 表面採集遺物1

1. 集合

2.3. 中国青花碗

4. タイまたはミャンマー白濁釉鉢

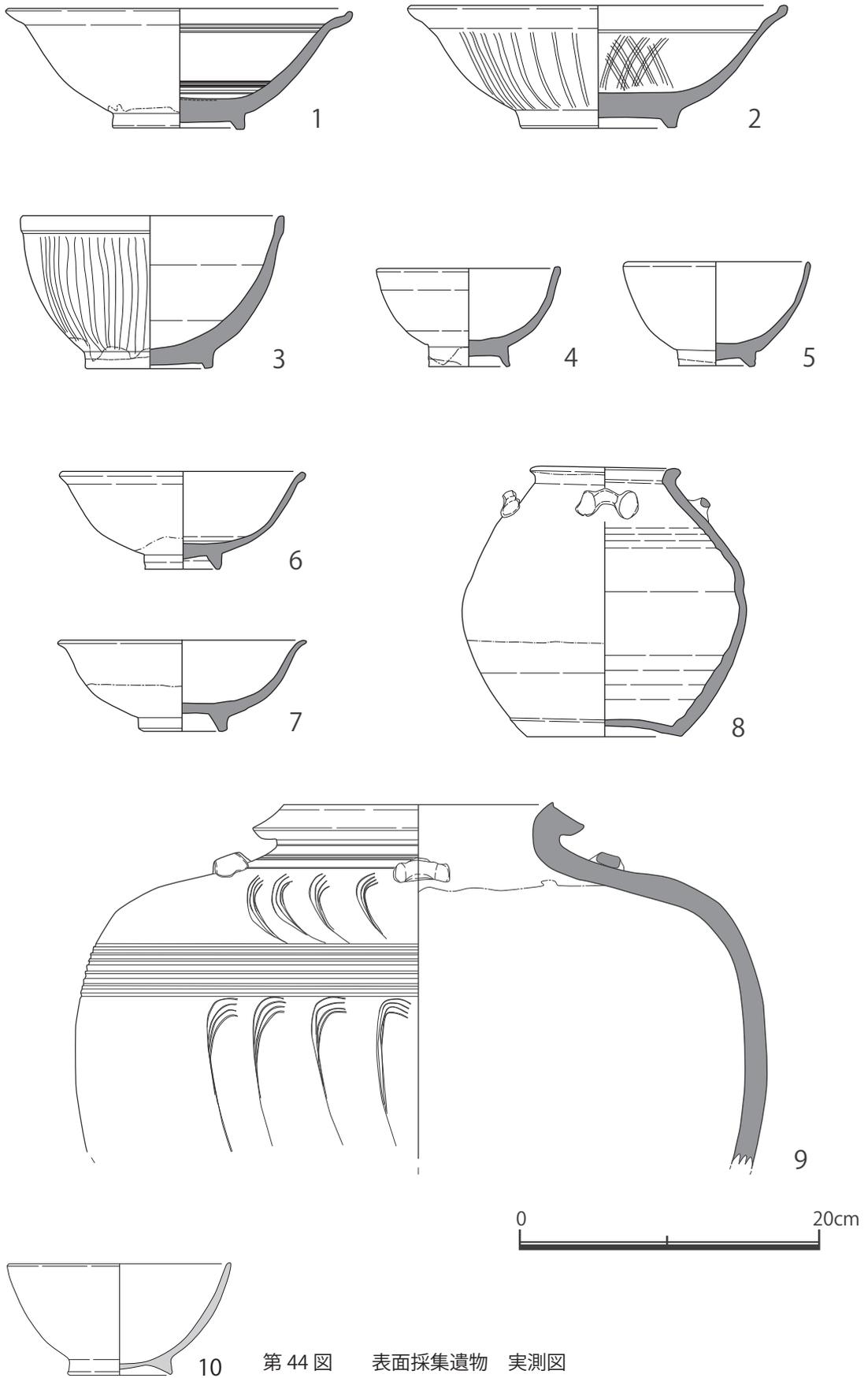
5.6. タイ青磁碗





第43図 表面採集遺物2

- | | |
|----------------|---------------|
| 1.2. ミャンマー青磁碗 | 6. ミャンマー土師質碗 |
| 3.4. ベトナム中部青磁碗 | 7. クメール黒褐釉四耳壺 |
| 5. タイ青磁盤 | 8. 中国産褐釉四耳壺 |



第44図 表面採集遺物 実測図

1.2. タイ青磁盤

3. タイまたはミャンマー白濁釉鉢

4.5. ミャンマー青磁

6.7. ベトナム中部青磁碗

8. 広東系褐釉四耳壺

9. クメール黒褐釉四耳壺

10. ミャンマー土師質碗

第2部 ロンヴェーク遺跡の調査報告

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査の経緯

ロンヴェーク遺跡は、ポスト・アンコール期カンボジアの王都である。土塁と堀に囲まれた16世紀の王都の存在はこれまでも認知されていたにも関わらず、本格的な考古学調査がされることはなかった。アンコール王朝末期からポスト・アンコール期にかけては、隣国からの侵略と内政不安とで、カンボジア史の中でもとりわけ複雑な時期にあたる。アンコール以降、王都はスレイ・サントー、プノンペン、ロンヴェーク、ウドンと点々と遷り、国内情勢も不安定であったとみられる。そのためアンコール王朝末期からポスト・アンコール期にかけては、暗黒の時代といわれるほど、その実態が分かっていない。本プロジェクトは、まさにこの暗黒の時代にあたる15世紀から16世紀を主な対象としている。本報告は、王都ロンヴェークにおける初の考古学的調査報告であり、今後更なる調査に向けての基礎的な資料集積としての役割も兼ね備えている。

平成22年度から平成24年度文化庁伝統文化課所管の文化遺産国際貢献事業（文化遺産国際協力拠点交流事業）「カンボジア・ウドン遺跡及びロンヴェーク遺跡等の保存に関する拠点交流事業」において、奈良文化財研究所はポスト・アンコール期の王都ロンヴェーク遺跡とクラン・コー遺跡の考古学的調査をおこなった。調査に際してはカンボジア王国文化芸術省、プノンペン王立芸術大学考古学部協力のもと、遺跡踏査・探査ならびに人材養成事業を実施した。ロンヴェークにおける調査は3次にわたっておこなわれた。主な調査参加者は本報告8ページに記載されているのでそちらを参照されたい。

第2節 調査の概要

第1次調査

平成23年7月29日から8月1日にかけてロンヴェークにおいて調査をおこなった。ロンヴェークは東西約2km、南北約2.5kmの土塁に囲まれており、遺跡の範囲が広大である。このため、本格的な遺跡踏査に先立ち、日本治水福岡の西田健典氏に依頼し、マルチローターヘリを用いた空中写真撮影を実施した。撮影は、ロンヴェークの北西隅、西辺土塁中央部、南西隅、北東隅、トゥオル・バイヨーク寺院の各地点においておこなった（第45図、46図）。土塁と土塁の間にはもともと堀が走っていると考えられるが、現在は村人により水田として利用されている。撮影当時は雨季に入っていたため、水田に水が張られ、土塁と堀の様子が空中撮影によって明瞭に区別できる状態であった。また、ロンヴェーク東辺には土塁は存在しておらず、トンレサップ川の氾濫原に面していることが判明した（第51図）。つまりロンヴェークは洪水の被害に遭いにくいやや高い土地を選んで形成されたものとみられる。



第45図 ロンヴェーク西側土塁と堀



第46図 ロンヴェーク南西隅土塁

第2次調査

平成24年1月9日から12日にかけて、ロンヴェーク南側の踏査をおこなった。すると南辺土塁の周辺に数々のマウンドが存在することが判明し、いくつかのマウンドでは遺構や遺物を確認した。このため、便宜的にマウンドに番号を付し、インヴェントリーを作成したうえで、2号マウンドと、1号レンガ遺構において小規模なトレンチ調査を実施した(第47図、48図)。その結果、2号マウンドにおいて設定したトレンチからは遺物は検出されず、自然のマウンドを利用して何らかの活動がおこなわれていたと推定される。1号レンガ遺構においてはマウンド上にレンガ構造物が構築されていた。既にレンガ構造物は崩壊が激しく(第49図)、盗掘坑も見られたため(第50図)、レンガ構造物の前面にトレンチを設定した。トレンチからは目立った遺物が発見されることはなく、土器片が数点出土したにとどまったが、マウンド周辺から明青花を採集した。

第3次調査

平成24年8月13日から16日にかけて、ロンヴェーク遺跡全体の遺構・遺物分布を把握する基礎的なインヴェントリー作成のため、遺跡内の踏査を開始した。手法としては、基礎情報を記録するためのインヴェントリーシートを作成することとした。これを基に遺構や遺物を確認した地点のGPSや遺物種類などの情報を記し、情報の蓄積を心掛けた。踏査の結果、総数53地点においてデータを収集した。

第4次調査

平成24年11月30日から12月3日にかけて、ロンヴェーク遺跡のインヴェントリー作成のため、遺跡内の踏査をおこなった。踏査によってさらに41地点データの収集に成功し、合計94地点において遺構ないし遺物の分布を確認するに至った。しかし、今回までの調査でロンヴェーク遺跡内全範囲を網羅できておらず、今後継続的な踏査が必要である。



第47図 2号マウンドの調査



第48図 1号レンガ遺構の調査



第49図 1号レンガ遺構



第50図 1号レンガ遺構盗掘坑

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の立地

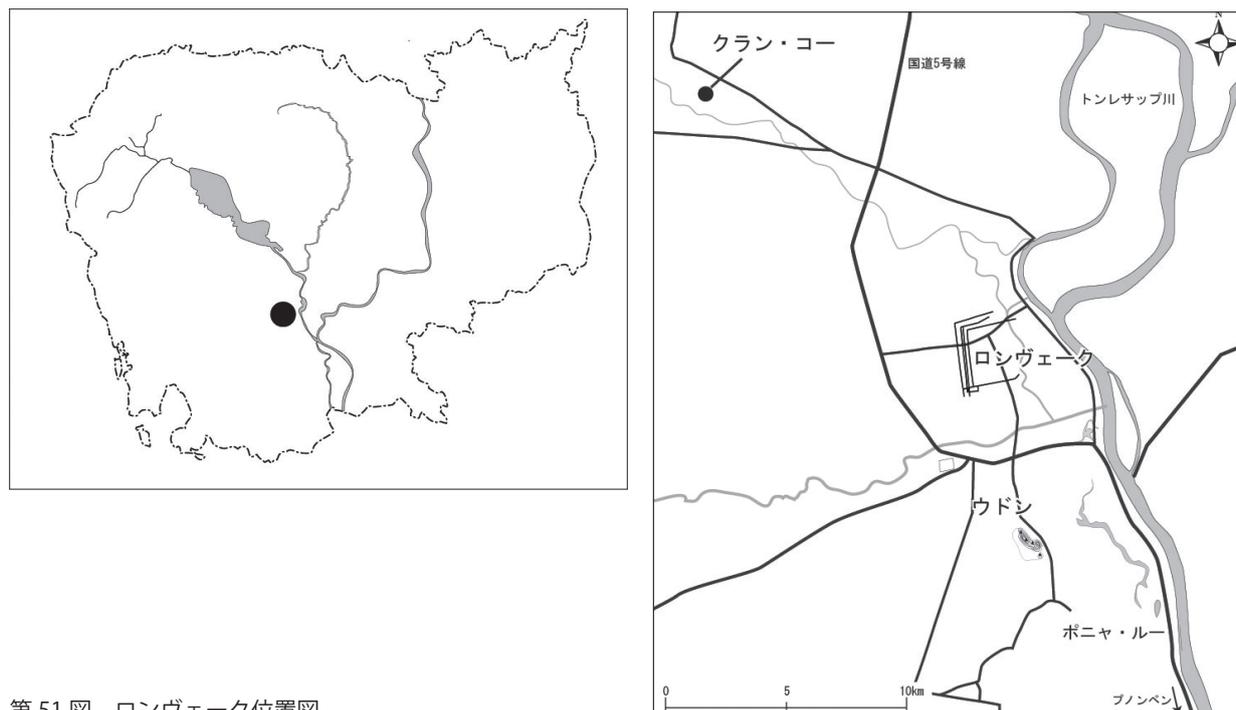
ロンヴェークはポスト・アンコール期の王都である。現在の首都プノンペンから国道5号線沿いに約35kmほど北上した地域、カンボジア東部コンボン・チュナン州コンボン・トロラッ郡に位置する。ロンヴェークの南約7kmの地域にはのちの17世紀から19世紀の王都ウドン、聖山プノム・プレア・リアチ・トロアプがそびえる。ロンヴェークはトンレサップ湖からメコン川に合流するトンレサップ川西岸の微高地上に立地している。東西約2km、南北約2.5kmの三重の土塁と堀に囲まれているが、東側には土塁は存在せず、トンレサップ川の氾濫原に向かって開口した構造をもつ。河川・陸路双方の利便性を兼ね備えた立地であるといえる。

第2節 ロンヴェークの歴史的背景

ポスト・アンコール期に関するほぼ唯一の国内文献史料である『王朝年代記』など文献史料による先行研究は、北川香子によるものが詳しい（北川1998）。北川によると、アンコール王朝は隣国アユタヤからの侵略に遭い、1431年ポニェ・ヤート王はアンコールを放棄し、スレイ・サントーのバサンに遷ったとされる。中国の『大明実録』には1372年と73年に真臘国の「巴山王」の中国への遣使記録が残されており、もともとバサンにはアンコール王朝末期ごろから何らかの勢力が存在していたと考えられる。その後ポニェ・ヤート王は王都をプノンペンへ遷都する。この頃バサン勢力と正統王勢力との争いが激化し、バサン勢力のスダチ・コーンと、正統王の弟チャン・リエチエが戦い、1525年にチャン・リエチエが勝利、即位し、1529年にロンヴェークを建都した。しかし、1594年アユタヤによりロンヴェークは陥落したとされている。その後、一時スレイ・サントーに王都が遷るが、チェイ・チェッタ王により1620年にカンボジアは統一、ウドンに王都が遷都される。1855年のプノンペン遷都までウドンは王都として存続したとみられる。

1594年にロンヴェークからウドンに遷都されたといわれるが、17世紀にカンボジアを訪れたオランダ人は、カンボジアの都をLeweckやEauweckと表記しており、これはLongvekにあたると思われる。つまりウドン遷都後もロンヴェークが機能していたか、またはウドンと直線距離にして5、6kmほどしか離れていないことから、何らかの形で継続して利用された可能性も考えられる。すなわち、ロンヴェークはカンボジア国内文献上では16世紀代の王都であるが、17世紀以降の痕跡の存在にも留意したうえでの調査が求められた。

参考文献：北川香子「ポスト・アンコールの王城」、『東南アジア-歴史と文化-27』、p48-72、1998



第51図 ロンヴェーク位置図

第3節 遺構

先述のとおり、文献史料に基づく研究は先行的に進められているが、『王朝年代記』自体の信頼性が乏しいのもまた事実である。というのも、王朝年代記は19世紀になって編纂されたものであり、その史料価値をどのように捉えるか難しい問題を伴っている。したがって、ロンヴェークを研究する際に、実際の遺構・遺物に真正面から向き合う考古学的な手法が有効になるものと考えられる。奈良文化財研究所は2010年度よりロンヴェークにおける考古学的踏査を開始した。手法としては、遺構ないし遺物を確認した地点に番号付けをおこない、GPS・遺物情報などを記録し、インヴェントリーを作成した。そもそもロンヴェーク内における遺構・遺物の分布などの基本情報さえ、不明であったことから、まずはロンヴェークの全体情報を把握することに努めた。

調査の結果、ロンヴェークは三辺を土塁と堀に囲まれた方形の都城であることが判明した。また、ロンヴェーク内には仏教テラスなどの上座部仏教寺院、マウンドなど様々な遺構が確認された。現在までのところ寺院または仏教テラス遺構20基、マウンド9基が確認された。村人からの聞き取り調査では、ロンヴェーク内には108基の遺構が存在しているという。今回の調査では、ロンヴェーク内全域を網羅できておらず、未踏査地域がかなり残っているため、今後更なる調査が必要である。本項では、確認された土塁と堀、寺院についてその概要を記す。

土塁と堀 ロンヴェークは三辺を土塁と堀に囲まれている。現在、土塁は一部が近年になって農道によって削られ、断面が露出する箇所が存在するものの（第53図）、そのほとんどが良好な状況で確認することができる。また、堀は稲田として利用されている。ロンヴェークの土塁は、自然地形を活かした範囲に設計されているようで、氾濫原よりやや高い台地の縁を利用する形で土塁を形成している。北・西辺はそれぞれ三重に、南辺は一重に土塁を築盛し、東側はトンレサップ川の氾濫原に面するためか、土塁は存在していない。土塁はレンガやラテライトなどを使用せず、積土のみで築盛されている。高さは場所によって異なり、約4m～8mをはかる。また、南西隅には出隅状に複雑に張り出した土塁によって区画されており、ロンヴェーク都城の入口ないし防御施設であった可能性が考えられる。南辺土塁から、南側、すなわちウドン市街地方面に向けて3本の土塁がさらに南進しており、今後さらなる調査を要する。



第52図 南辺土塁と堀（西から）



第53図 西辺土塁断面



第54図 西辺土塁（南南西から）



第55図 切り通された西辺土塁

寺院 ロンヴェーク内に見られる寺院はすべからく上座部仏教寺院である。しかしながら、ロンヴェーク内に見られる寺院の建立年代を確定させるのは現段階では難しいといわざるを得ない。確実な碑文史料などが少ないことが理由の一つである。建立年代を特定することはかなわないが、ロンヴェーク内寺院の特徴を挙げたい。

寺院の種類 ロンヴェーク内に見られる上座部仏教寺院は大まかに2種類に分けられる。一つ目はマウンド上に建てられるテラス寺院（ヴィハーラ）、2つ目は平地に展開する比較的大規模な上座部仏教寺院（パゴダ）である。テラス寺院は、シンプルな構成で成り立っている。仏像が鎮座するヴィハーラの手前に平面長方形を呈したテラスまたは、広場状の儀式空間が広がり、これらの構造物全体をセマ石が結界するものである。アンコール地域においても、このスタイルはしばしば見受けられ、アンコール・トム内には仏教テラス寺院が王朝末期からポスト・アンコール期にかけて次々と造営されている。しかし、ロンヴェークに見られるテラス寺院は、その多くが自然ないし人工のマウンド上に造営されている。一方、上座部仏教寺院のほとんどは現在も寺院として機能しており、近年になり増改築されているのがほとんどである。このため、ロンヴェーク期の寺院構造を復元することは現段階ではかなわない。しかし、基本構造としては、本殿・僧院・講堂・池が伽藍内に配置される。この場合、マウンド上に造るのではなく、洪水を避けた平地に展開しているようである。

増改築 アンコール期またはポスト・アンコール期に属する前身遺構を現在の寺域内に確認できる寺院が複数存在する点である。たとえば、ワット・トラエン・カエンでは、アンコール期の砂岩製構造物とマウンドが寺域の中心部に存在し、現在ではそのマウンド上に釈迦坐像が構築されている。また、テラス寺院であるヴィヒア・バツ・コーでは、現在のヴィハーラが前身遺構であるとみられるレンガ造の基礎の上に建てられている。前身遺構の位置を活かす形で、現在も信仰が続けられているともいえる。

構造材 寺域内にみられるストーパーやヴィハーラの基礎はそのほとんどがレンガ製であることが挙げられる。アンコール期の寺院の多くは砂岩やラテライトが用いられるが、ロンヴェークではレンガを用いるのが主流であったとみられる。一方、寺域を結界するセマ石は砂岩製である。つまり砂岩の使用が限定的であったといえるだろう。



第56図 マウンド上に建つヴィヒア・バツ・コー



第57図 ヴィヒア・バツ・コー本堂直下の前身遺構



第58図 プレア・アン・テープ本堂



第59図 ワット・トラエン・カエン内アンコール期遺構

セマ石 ロンヴェーク内寺院の一部にはセマ石（結界石）を確認することができた。セマ石は、寺院の四隅とその各辺中央の合計 8 か所に配置され、寺域を結界する意味を持つ。カンボジアでは上座部仏教寺院に特徴的にみられるものである。今回の調査でセマ石を確認することができたのはごくわずかで、ワット・トラエン・カエン、ヴィヒア・バツ・コー、トゥオル・バイヨークなど数か所のみである。しかも、残念ながら原位置をとどめているセマ石は殆ど確認できず、地上に放置されたままのセマ石も少なくなかった。唯一ワット・トラエン・カエン本堂のセマ石は改築に伴い埋め直されているものの、しかるべき位置に配置されていた。ロンヴェーク内で確認したセマ石は大きく 2 種類に分けられる。一つは、砲弾型または下部にくびれを持つ矛先型の中心に一条の稜線が縦方向に走り、表裏共に装飾を伴わず、頂部には蓮の蕾が表されるタイプ（第 60 図）。2 つ目は、同じく砲弾型または矛先型の表面に唐草文様などの装飾を伴うタイプである（第 61 図）。装飾を伴うタイプは現在までのところワット・トラエン・カエンでのみ確認されている。

仏像 現在ロンヴェーク内で確認できる仏像の殆どは新しく造像されたものであるが、ごく一部の寺院にロンヴェーク期にさかのぼる可能性のある仏像を確認することができた。ワット・トラエン・カエン本堂内に安置される本尊は四仏立像が安置されている。現在の四仏は後世に造像されたものであるが、ロンヴェーク期にさかのぼると想定される四仏に関しては、現在足材のみ確認できる（第 62 図）。足の全長が 1m を超すことから、四仏本体の高さも相当であったと想定される。またその他にもヴィヒア・バツ・コーにはアンコール期寺院建築の赤色砂岩を転用した仏陀坐像が祀られている（第 63 図）。



第 60 図 トゥオル・バイヨークのセマ石



第 61 図 ワット・トラエン・カエンのセマ石



第 62 図 ワット・トラエン・カエン四仏足材



第 63 図 ヴィヒア・バツ・コー仏陀坐像

第4節 出土遺物

ロンヴェークにおける踏査では、地表面から数多くの遺物採集することができた。確認した遺物は多岐にわたり、表採遺物の半数以上が中国青花片であることは特筆される。ロンヴェーク時代に行われたであろう活発な貿易活動の証である。表採遺物は総数 1500 点を数える。このうち 60% が中国青花、10% が施釉陶器、10% が無釉炆器、11% が土器でそのほかクメール陶器、中国青磁、白磁、五彩などを確認した。

中国

青花

碗 第 64 図 1 は青花碗である。口縁径 14.1cm、器高 6.0cm、高台径 5.6cm を測る。外面口縁部文様帯以下に馬文が描かれている。内底見込にはコングが表されている（第 66 図 1）。第 64 図 2,3 は青花劃花文碗である。口縁径 18.1cm、高台径 6.6cm で同一個体である。口縁はやや端反り気味で、外面口縁部には唐草文帯、体部下端には略化した蓮弁文帯が描かれる。外面体部には劃花文が全体に施されている。内面口縁部には菱格子帯文、見込には山水文が表されている。高台内面に二重円枠の中に銘が施されていたようであるが、残存部が少ないため判読不能である（第 66 図 2）。第 64 図 4 は青花碗片である。高台径 5.2cm。口縁部は残存していないが、外面体部には花卉文、内底見込には植物文が施されている。高台内面には「永保長寿」銘が記されている（第 66 図 3）。第 64 図 5 は青花碗底部片である。高台径は 7.8cm である。内底見込に植物文が描かれ、高台内面には「大明年造」銘が円形枠の中に記される（第 66 図 4）。第 64 図 6 は青花碗底部片で高台径 9.2cm を測る。内底に植物文が施され、高台内面には銘が残るが判読困難である（第 66 図 5）。第 64 図 7 は青花碗底部片である。高台径 8.0cm、内底が饅頭心状に膨らむ。内底見込には花卉文が描かれ、高台内面には方形枠の中に篆書体で「精製」を表しているとみられる（第 67 図 1）。第 68 図 8 は青花碗底部片で、高台径 4.6cm を測る。内底見込には人物文が描かれ、高台内面には円形枠の中に「福」銘が表されている（第 67 図 2）。第 64 図 9 は青花碗片で、仙芝祝寿文が表される。口縁径 12.0cm、器高 5.8cm、高台径 6.4cm を測る。高台はやや外側に開き、内側に銘が薄く書かれているが、状態が悪く判読不能である（第 67 図 3）。第 64 図 10 は青花碗底部片である。内底には団龍文が描かれ、高台内面には文字が表されるが判別不能である。

皿 第 64 図 11 は青花皿底部片で、内底には鳳凰文の一部が見て取れる。高台内面には「萬福倣同」と思われる文字が残る。第 64 図 12 は青花芙蓉手皿ないし盤の口縁部片である。口縁径 14.6cm を測る。口縁端部は輪花状に作り出される。外面には唐草文が施され、内面口縁部には渦巻文帯が巡る（第 67 図 4）。

壺 第 65 図 1 は青花蓋片で、壺または罐に合わさるものと思われる。径 4cm である。外面には唐草文が施され、内面は無文である（第 67 図 5）。

合子 第 65 図 2 は青花合子蓋片である。径は 6.4cm で、平形合子であったと思われる。外面には花卉文が描かれる（第 67 図 6）。第 65 図 3 は小型合子の身片である。口縁径 1.8m、器高 2.1cm、高台径 1.2cm を測る。外面胴部に花卉文が描かれる（第 67 図 7）。

特殊遺物 第 65 図 4 は青花脚付小形製品の脚部分である。獣脚状に作り出されている。外面脚部分には施文されるが、内面は施釉されるものの無文である（第 68 図 1）。

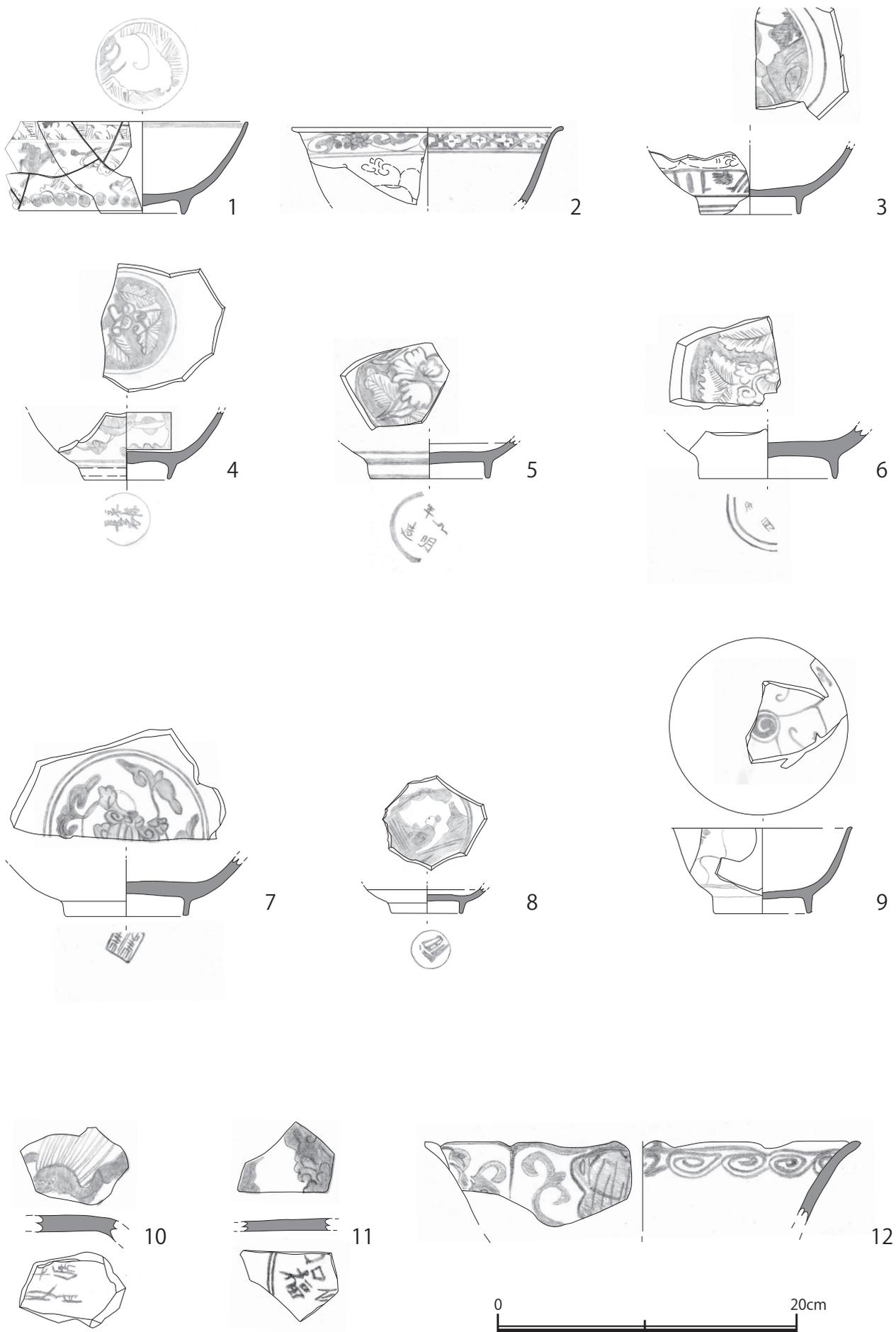
緑地青花 第 65 図 5 は緑地青花碗口縁部片である。口縁径 8.2cm である。外面は全面青磁釉が施され、内面には青花で菱格子帯文が表される（第 68 図 2 中）。

黄地青花 第 65 図 6 は黄地青花小碗底部片である。高台径は 3.6cm で、外面に黄色釉が施される。高台内と内面は青花で表現され見込には花卉文が描かれている（第 68 図 2 左）。

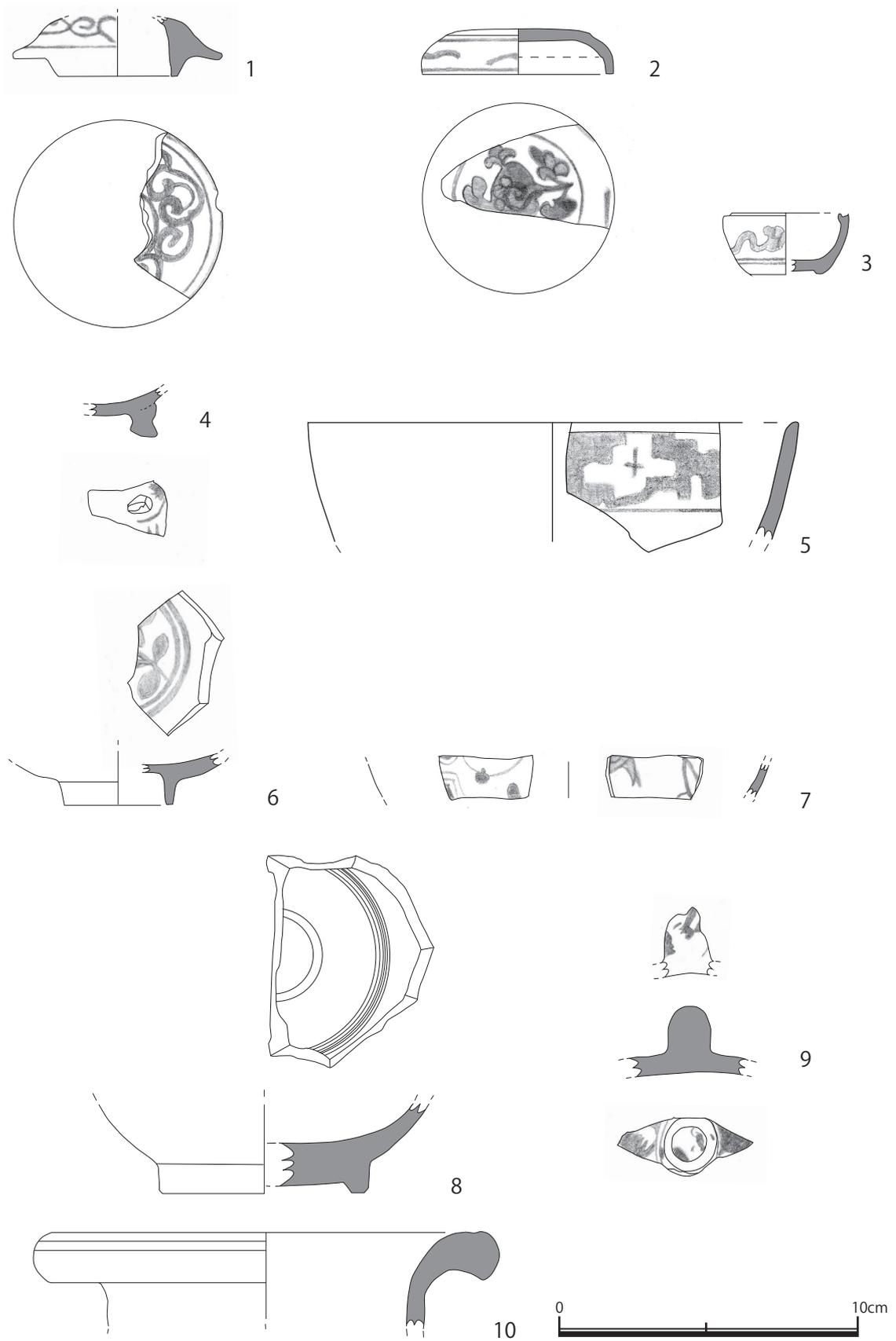
五彩青花 第 65 図 7 は五彩青花碗体部片である。外面には緑と赤地が残存しており、内面体部には青花による文様が施される（第 68 図 2 右）。

タイ青磁・鉄絵 第 65 図 8 はタイ青磁碗底部片である。高台径 6.8cm。釉色は灰緑色に近く、外面体部下半まで、内面は全面施釉されている。内底に二重圏線が施され、高台内面には筒形敷柱痕が残る（第 68 図 3）。第 65 図 9 はタイ鉄絵製品の一部であるが、器形は不明である。素地を摘み状に包むように作り出している。外面体部に濃紺から黒色に発色する鉄絵を施し、内面は無釉である（第 68 図 4）。

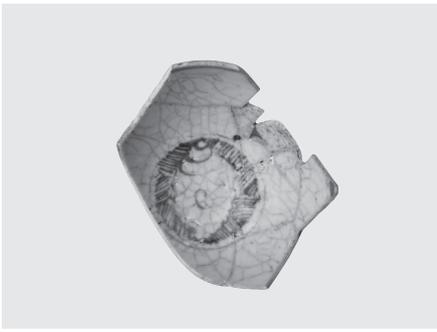
クメール黒褐釉陶器 第 65 図 10 はクメール陶器黒褐釉壺口縁部片である。口縁径 14.4cm を測る。内外面とも黒褐釉が施されている（第 68 図 5）。



第 64 图 出土遺物実測図 1



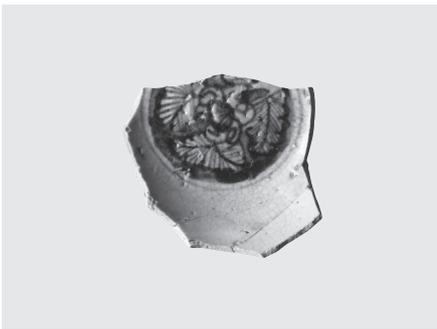
第 65 图 出土遺物実測図 2



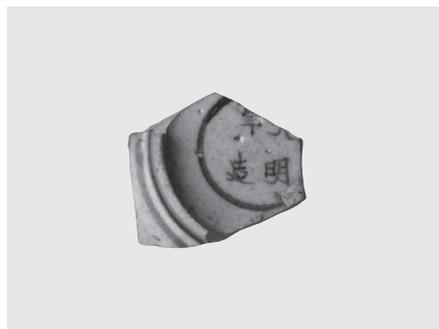
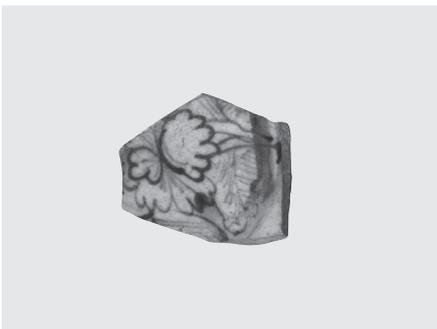
1. 青花碗片 1



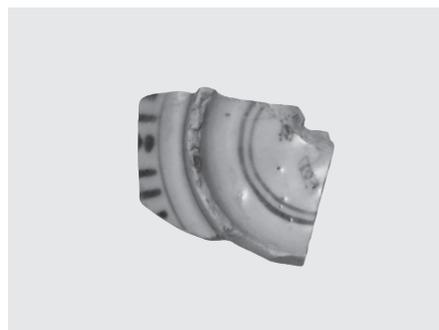
2. 青花碗片 2



3. 青花碗片 3

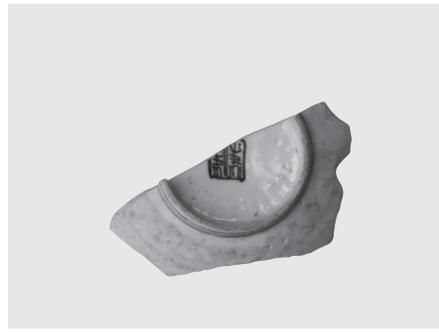


4. 青花碗片 4

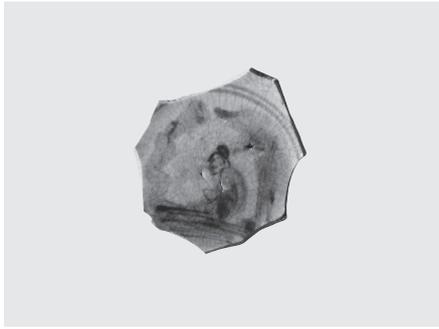


5. 青花碗片 5

第 66 图 出土遺物写真 1



1. 青花碗片 6



2. 青花碗片 7



3. 青花碗片 8



4. 青花輪花盤片

5. 青花蓋片

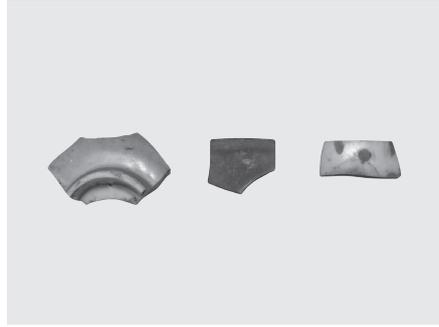
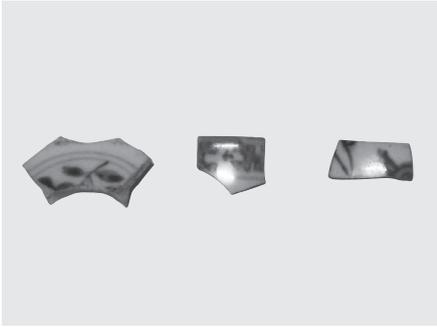


第 67 图 出土遺物写真 2 6. 青花合子蓋片

7. 青花合子身片



1. 青花脚部片



2. 黄地青花、緑地青花、五彩青花片



3. タイ青磁碗底部片



4. タイ鉄絵摘部片



5. クメール黒褐釉陶器壺片

第 68 図 出土遺物写真 3

第3部 論考

第1章 出土陶磁器からみたクラン・コー遺跡とロンヴェーク遺跡

奈良文化財研究所企画調整部 佐藤由似

1. はじめに

従来のカンボジア考古学はアンコール期や先史時代にその対象が集中し、ポスト・アンコール期は等閑視されていた。ポスト・アンコール期はアンコール王朝が終焉した1431年からフランスによる植民地統治時代が始まる1863年年までの約430年間を指す。この430年間という時間は、長らく闇に包まれたままであった。近年になり、奈良文化財研究所を中心として当該期に関する考古学的調査が端緒についたばかりである（奈良文化財研究所2008）。今回、ポスト・アンコール期の王都ロンヴェークと墓葬が発見されたクラン・コー遺跡に関する調査がおこなわれたことにより、多くの出土遺物を検出することができた。出土遺物は、当該期カンボジアを語る上で重要な役割を持つ。本稿では、両遺跡出土の出土遺物の中でも陶磁器を中心に振り返り、その特徴と意義について論じたい。

2. クラン・コー遺跡出土陶磁器

第1章で報告の通り、クラン・コー遺跡の発掘調査では墓壇2基を良好な状態で検出することができたと同時に、まとまった量の遺物を一括性が高い状態で確認した重要な事例であるといえる。副葬品のうち輸入陶磁器に関しては、シーサッチャナライ青磁、中国青磁、青花を検出した。また、表採遺物からはさらに多様な陶磁器類を確認した。数多くの明青花、シーサッチャナライ青磁、ビンディン青磁、ミャンマー青磁、クメール黒褐釉陶器、在地土器などが検出され、一部徳化窯系白磁合子などがみられた。これら出土遺物のうち青花は小野分類碗B群C群を中心とし、おおよそ15世紀から16世紀初頭に位置づけられ、その他の東南アジア産陶磁器も、同様の年代が与えられる（表1）。当該期は1431年にアンコール王朝が崩壊したのち王都が転々とし、国内の政情も不安定な時代に差し掛かる時期にあたる。このような時期に、今回出土したような陶磁器を入手し得た勢力がクラン・コー地域に存在したことを示唆することができよう。

3. ロンヴェーク遺跡出土陶磁器

ロンヴェークでおこなった調査では東西2km、南北2.5km、総面積約500haにおよぶロンヴェーク全体をくまなく踏査することはなしえなかった。しかし、あくまで現段階での判断となるが、ロンヴェークの南側を中心に豊富な量の遺物を表採することができたといえる（第1図）。とりわけ南辺土塁周辺に多く分布していたようである。南辺土塁東端部周辺（第2図）とプレア・アン・テープ周辺では明青花を中心に輸入陶磁器の分布密度が濃い状況であったと言える。加えて、プレア・アン・テープにほど近いマウンドの周辺からは、鉄滓状の遺物を数点表採した（第3図）。当地点で鉄生産をおこなっていたかどうかについては今後の調査が必要であるが、ポスト・アンコール期における金属生産の実態把握への第一歩となる可能性を秘めている。

王都ロンヴェーク出土陶磁器は、上述のクラン・コー遺跡出土陶磁器より1段階下った年代が与えられる。ロンヴェークで検出された陶磁器はその6割が中国青花である。とりわけ小野分類碗E群、F群、同分類皿C群にあたる明代後期、16世紀後葉から17世紀前葉に特徴づけられるものが多い。景德鎮産青花碗がその大半を占め、団龍文碗、饅頭心型花卉文碗などのほか、五彩青花や緑地青花なども小片ながら確認することができた。『王朝年代記』によるとロンヴェークは1529年から1594年まで存続していたといわれる。ロンヴェークで確認された出土遺物の中心はまさに16世紀後葉から17世紀前葉となり（表2）、年代記とほぼ大差ない年代観を与えることができる。ただし、ロンヴェークでは17世紀後葉以降の遺物も全体の4割ほどを占めることから、現段階で『王朝年代記』に記載された史実をそのまま反映しているとは言えない。むしろ、17世紀後半、王都が7kmほど南のウドンに遷ったのちも、何らかの形でロンヴェークは利用されていた可能性を考えるべきであろう。

4. 陶磁器の流通

クラン・コー遺跡からは15世紀から16世紀前葉にかけての明青花と多様な東南アジア産陶磁器を確認した。

一方、王都ロンヴェークからは16世紀後葉から17世紀前葉の明青花を中心に18世紀代に至るまでの中国青花多く検出した。

クラン・コー遺跡出土景德鎮青花、シーサッチャナライ青磁、ミャンマー青磁、ビンディン青磁などの15世紀中葉から16世紀前葉の資料に関しては、カンボジア国内での検出事例は残念ながら少ない。しかしながら、東南アジア海域で発見された沈没船資料、たとえばコー・サムイ沖やサンタ・クルス沖資料に共通性の高い陶磁器が確認できる(Brown 2009)。当該期はタイ・ミャンマー・ベトナムで生産された陶磁器が積極的に海外輸出され始める時代にあたる。クラン・コー遺跡出土の東南アジア産陶磁器がどのようなルートでもたらされたのかは、今後さらなる調査が必要であるが、おそらく海上・陸路・河川を駆使してもたらされたものを想定される。たとえばタイ・ミャンマー陶磁器はシャム湾を渡り、カンボジア側へ陸揚げされた可能性と、いわゆる東西回廊など陸路を最大限利用してカンボジアまでもたらされた可能性が想定される。また、ビンディン青磁も陸路を利用して当地域までもたらされた場合と、中国青花などととも貿易船に積載されてカンボジアにもたらされた可能性もありうる。いずれにしても、当該期の流通経路の更なる検討には他地域での同時代遺跡に関する調査成果の蓄積が必要である。

一方、ロンヴェーク出土陶磁器の約6割は中国青花であると述べた。これはロンヴェークがトンレサップ川西岸に面し、貿易にも有利な土地に位置していることが少なからず影響しているとみられる。17世紀のポルトガル人宣教師ガスパール・ダ・クルスも河川を遡上し、カンボジアへ上陸したということから(ガスパール 1987)、貿易船も河川ルート、メコン川からトンレサップ川を遡上し、プノンペンを経てロンヴェーク周辺まで到達したと想定することが可能である。

17世紀オランダ人の描いた絵地図(第4図)には(Muller 1917)、Eavweck という表題が付けられ、当時の王都ロンヴェークやウドンと思われる王都とトンレサップ川沿いに建ち並ぶ家屋、そしてこれらを結び、山並みの向こう側へ続く陸路が描かれている。おそらく当時の政治・交易に欠かせないものが描かれていると考えられるともいえるだろう。今回の調査では、当時の王都やその周辺の遺構、ならびに陶磁器を具体的に考察することにより、当該期の社会・経済活動の一端をわずかながら明らかにすることができたのではないだろうか。本調査を端緒として、今後も当該期カンボジアの様相を実証的に探るべく、王都ロンヴェークやクラン・コー遺跡周辺での調査をさらに続けていく必要があるだろう。

参考文献

小野正敏 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究 No.2』P.71-88、1982

ガスパール・ダ・クルス、日埜博司訳 『十六世紀華南事物誌』明石書店、1987

奈良文化財研究所 『カンボジアにおける中世遺跡と日本人町の研究』、2008

Brown, Roxana. The Ming Gap and Shipwreck Ceramics in Southeast Asia, Towards a Chronology of Thai Trade Ware. Bangkok. The Siam Society under Royal Patronage, Bangkok, 2009

Muller, Hendrik P.N. De Oost-Indische Compagnie in Cambodja en Laos: 'S-Gravenhage, 1917

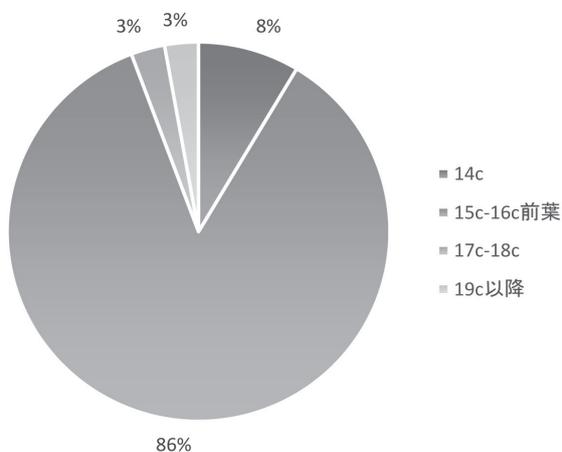


表1 クラン・コー出土遺物年代組成

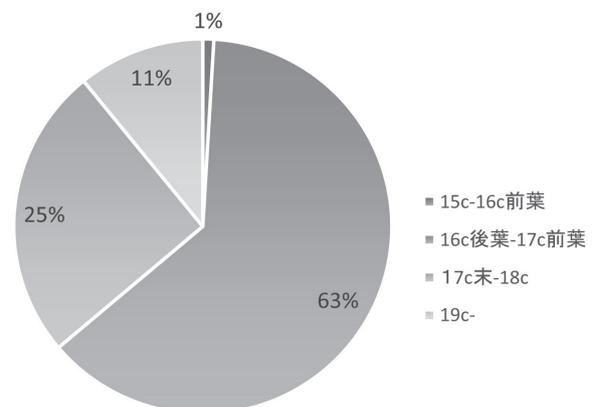
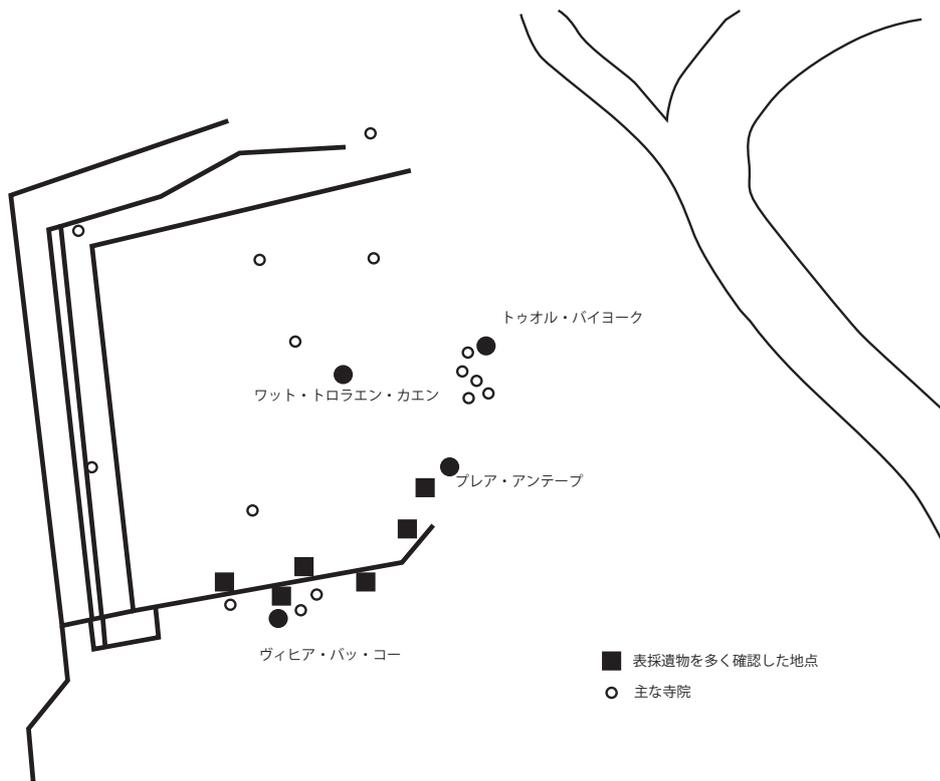


表2 ロンヴェーク出土遺物年代組成



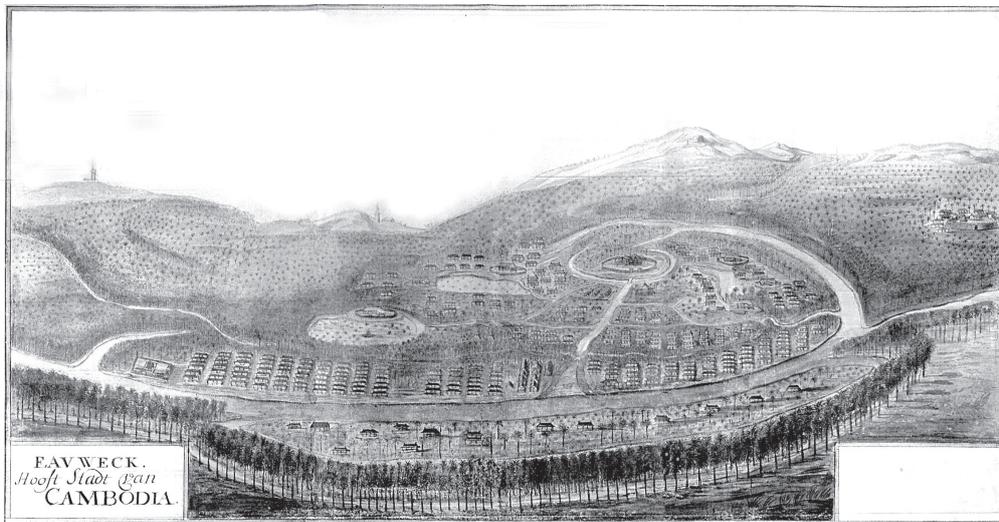
第1図 ロンヴェーク模式図



第2図 ロンヴェーク南東隅表採遺物



第3図 プレア・アン・テープ周辺採集鉄滓状遺物



第4図 ロンヴェーク周辺絵地図 (Muller1917)

第2章 クラン・コー遺跡出土遺物の自然科学的調査および保存処理

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 田村朋美

1 ガラス小玉

カンボジア王国プノンペン近郊のコンボン・チュナン州に位置するクラン・コー遺跡の発掘調査において多数のガラス小玉が出土した。ガラス製遺物の生産地や流通ルートに関する研究を進めるにあたっては、製作技法や化学組成に関する情報が非常に重要である。今回、当遺跡出土ガラス玉類について、観察および分析化学的手法により製作技法、基礎ガラスの種類、着色因子に関する調査をおこなった。以下、その結果について報告する。

(1) 資料と方法

調査対象とした資料は、クラン・コー遺跡第三次発掘調査において出土したガラス小玉 118 点のうち、保存状態が比較的良好で淡青色不透明を呈するガラス小玉 8 点 (No.13,17,21,26,37,38,40,52)、風化が著しく淡黄白色を呈するガラス小玉 1 点 (No.5)、および淡青色不透明部分と風化により白色化した部分が縞状を呈するガラス小玉 1 点 (No.12) の計 10 点 (いずれも 1 号墓出土品) である。

これらのガラス小玉について実体顕微鏡観察をおこない、これらのガラス玉の製作技法を推定した。つぎに、保存状態が良好なくつかの個体についてアルキメデス法により比重を測定するとともに、蛍光 X 線分析法によりガラス小玉表面の非破壊分析をおこない、基礎ガラスの種類および着色因子を推定した。非破壊測定法では、風化や形状等の影響により資料本来の化学組成を知ることはできないものの、基礎ガラスの種類や着色要因を推定することは可能である。測定結果については、ガラス標準試料を用いて FP (Fundamental Parameters) 法によって規格化し、酸化物重量百分率で表示した。測定は、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置 (EDAX 社製 EAGLE III) を用いて真空中でおこなった。X 線管球はモリブデン (Mo)、管電圧は 20 / 50 k V、管電流は 100 μ A、計数時間は 300 秒である。

(2) 結果

製作技法 孔と直交方向に筋状の蝕像が認められることや、巻き付け始めもしくは巻き付け終りの痕跡と考えられる突起の端面に認められることから、芯棒に軟化した紐状のガラスを 2 ~ 3 回巻きつけることによって製作されたものと考えられる (図 1)。風化が著しく全体が淡黄白色を呈する No.5 についても孔と直交方向にめぐる筋状の蝕像がわずかに認められることから、同じく巻き付け法によるものと推察される。

基礎ガラスの種類 蛍光 X 線分析の結果、風化の著しい資料 No.5 および No.12 を除くと、各資料の化学組成は、 $PbO:29.1\text{--}36.6\%$ 、 $K_2O:7.04\text{--}10.8\%$ 、 $SiO_2:49.3\text{--}51.6\%$ であることから、カリ鉛ガラスに属するものと考えられる。

やや風化の進んだ No.12 は、 PbO を 30.1%、 K_2O を 5.6% 含有することから、保存状態の良い上述の資料と同様にカリ鉛ガラスであると考えられる。風化の影響により K_2O の含有量がやや少ない値を示したものと推察される。カリ鉛ガラスは、風化によって表層部分の K_2O の含有量が著しく減少する傾向が知られている (肥塚 1997)。

本資料中もっとも風化の著しい No.5 については、 PbO を 20.3% 含有するいっぽう、 K_2O の含有量は極めて少ない値を示した。ただし、上述の理由から風化の影響により K_2O の含有量が著しく減少した可能性が考えられる。 K_2O を含まない二成分系の鉛ガラスである可能性も考えられるが、二成分系の鉛ガラスの場合、風化表面では PbO が著しく増加し、 SiO_2 成分が大きく減少する傾向が知られる。本資料は他の資料と比較しても、 PbO の含有量が少なく SiO_2 の含有量が多い値を示していることから、本来は K_2O を一定量含有していたカリ鉛ガラスであった可能性が高いと推察される。

着色要因 本来の色調を確認することができない No.5 を除くと、いずれも淡青色不透明を呈する。これらは着色に関与する成分として Fe_2O_3 を 0.14-0.29%、 CuO を 0.43-0.81% 含有することから、これらの成分によって淡青色を呈するものと考えられる。ただし、 Fe_2O_3 は基礎ガラスの原料となる石英砂などにも由来する可能性があるため、着色材として意図的に添加されたものであるかどうかは不明である。 ZnO を 0.1% 前後含有するという特徴を有する。着色剤として添加された銅原料に由来すると考えられる。

いっぽう不透明感をもたらす要因については特定することができなかった。ただし、一般的な透明のカリ鉛ガラ

スの場合、CaOの含有量がほぼ1%以下であるのに対して、本資料は2-4%前後含有していることから、カルシウムが不透明感に関係している可能性が考えられる。

No.5については他の資料に比べてFe₂O₃含有量がやや多く、CuO含有量がやや少ない値を示した。このうち、Fe₂O₃に関しては鉄分の多い環境で埋蔵されていた場合、風化成生物中に鉄分が多く吸着する傾向があることが指摘されている。カンボジアの土壌は主に鉄やアルミニウムなどの風化残留物を主体とすることから、No.5のFe₂O₃の含有量は本来の値よりも多い高い値を示した可能性が高いと考えられる。いっぽう、CuOに関しては、風化表面で含有量がやや増加する傾向は指摘されているものの、大きく変動することはないことから、本来の値においても少ないものと推察される。また、同様に比較的風化により含有量が変動しにくいと考えられるCaOも少ない値を示している。これらのことから、No.5の本来の色調は他のガラス小玉と異なる可能性が残された。

(3) 考察

クラン・コー遺跡出土ガラス小玉は、巻き付け法によって製作されたカリ鉛ガラスであることが明らかとなった。カリ鉛ガラスは、少なくとも宋代の中国では存在していたことが知られている(安1984)。

カンボジアを含む東南アジア地域では引き伸ばし法で製作された“Indo-Pacific Beads”と呼ばれるガラス小玉が紀元前3世紀頃～17世紀まで流通する。これらのほとんどがアルカリケイ酸塩ガラスである。いっぽう、巻き付け法によるガラス小玉は“Chinese Coil Beads”と呼ばれ、12世紀頃より中国から大量に流入したと言われる(Francis 2002)。今回、クラン・コー遺跡で出土したガラス小玉が中国との関係性の強い巻き付け法によるカリ鉛ガラスであったことは、当該期の交流関係を示す重要な知見である。

いっぽう、中国産のカリ鉛ガラスは日本列島にも流入するが、12世紀頃には国産のカリ鉛ガラスが存在したことが明らかとなっている。当遺跡出土のガラス小玉についても生産地の解明が今後の課題となろう。当該期に東南アジアで流通したガラス小玉の分析事例は少なく、貴重なデータを提示できたものとする。

<参考文献>

安家瑤 1984「中国早期玻璃器皿」『考古学報』1984年第4期

肥塚隆保 1997『日本で出土した古代ガラスの歴史の変遷に関する科学的研究』博士学位論文

Francis, P. 2002. Asia's Maritime Bead Trade. University of Hawaii Press.

No.	色調	比重	重量濃度 (wt%)																備考	
			Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂		SnO ₂
5	白色不透明	/	0.39	0.38	4.52	71.2	1.42	0.07	0.63	0.10	·	0.59	0.19	0.03	20.3	·	0.03	0.09	tr	風化により白色化
12	淡青色不透明・白色不透明縞状	/	0.89	0.34	1.16	58.6	0.28	5.60	2.38	0.02	·	0.14	0.43	0.08	30.1	·	0.05	·	tr	風化により縞状に白色化
13	淡青色不透明	3.4	2.31	0.27	0.92	51.6	·	10.3	3.88	0.02	·	0.27	0.79	0.14	29.2	·	0.12	0.15	tr	
17	淡青色不透明	/	2.64	0.35	0.57	49.3	·	7.04	2.64	0.02	·	0.14	0.48	0.09	36.6	·	0.09	0.04	tr	
21	淡青色不透明	3.4	2.22	0.22	0.75	50.5	·	10.5	3.92	0.01	·	0.28	0.80	0.13	30.4	·	0.05	0.19	tr	
26	淡青色不透明	3.3	2.13	0.14	0.66	50.9	·	10.6	3.94	0.03	·	0.29	0.79	0.11	30.0	·	0.05	0.37	tr	
37	淡青色不透明	3.3	1.96	·	0.54	51.3	·	10.8	4.22	0.03	·	0.28	0.80	0.09	29.9	·	0.04	0.12	tr	
38	淡青色不透明	3.4	1.81	·	0.52	50.4	·	10.6	3.96	0.03	·	0.26	0.81	0.13	31.2	·	0.04	0.23	tr	
40	淡青色不透明	/	2.17	·	0.58	51.0	·	10.6	4.03	0.02	·	0.27	0.79	0.12	30.2	0.01	0.04	0.20	tr	
52	淡青色不透明	/	3.14	0.27	0.73	50.6	·	10.6	4.09	0.03	·	0.26	0.80	0.12	29.1	·	0.08	0.16	tr	

tr: 定量限界以下

-: 検出限界以下

表1 1号墓出土ガラス小玉の蛍光X線分析結果

No.	色調	比重	重量濃度 (wt%)																備考	
			Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	CuO	ZnO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂		SnO ₂
1	黄色不透明	3.9	0.34	0.13	0.51	43.3	·	2.36	1.72	0.02	·	0.33	0.09	·	50.7	0.02	0.14	0.30	0.12	白色半透明部分 黄色不透明部分
			0.64	0.24	1.36	60.7	·	2.30	1.16	0.02	·	0.58	0.06	·	32.2	·	0.07	0.39	0.34	
2	黄色不透明	3.8	0.62	0.31	0.76	44.2	·	3.84	0.68	0.01	·	0.28	0.04	·	39.6	·	0.11	0.33	9.26	
3	黄色不透明	3.8	0.54	0.11	0.71	40.0	·	3.82	0.10	0.01	·	0.37	0.17	·	51.5	·	0.18	0.46	2.07	
4	黄色不透明	3.9	0.16	0.15	1.04	41.7	·	3.73	0.09	0.01	·	0.38	0.19	·	50.7	·	0.07	0.16	1.67	
5	淡青色不透明	3.4	2.27	0.15	0.63	45.2	·	6.40	2.77	0.01	0.17	1.20	1.59	·	39.4	·	0.06	0.22	tr	
6	淡青色不透明	/	1.31	·	0.64	47.6	·	5.87	2.65	0.01	·	0.30	1.38	·	39.9	·	0.17	0.26	tr	
7	赤褐色透明	3.7	0.26	·	0.56	46.3	·	5.60	0.31	0.01	·	0.24	0.35	·	46.0	·	0.17	0.21	tr	

tr: 定量限界以下

-: 検出限界以下

表2 表採資料の蛍光X線分析結果

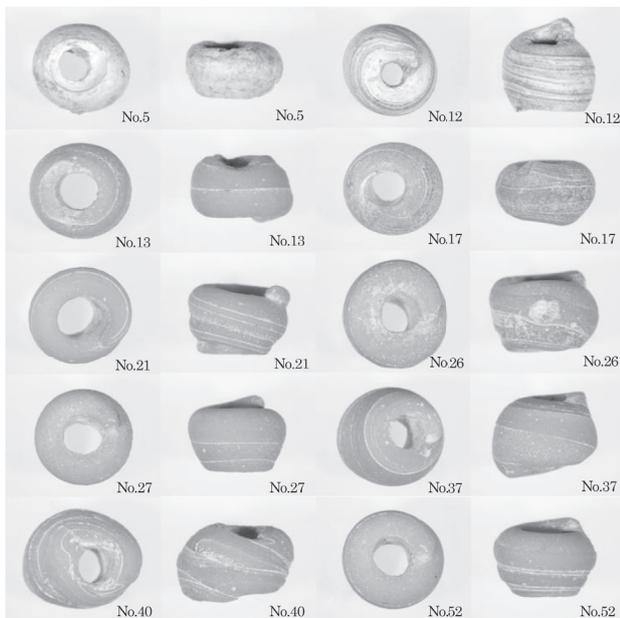


図1 1号墓出土ガラス小玉の顕微鏡写真

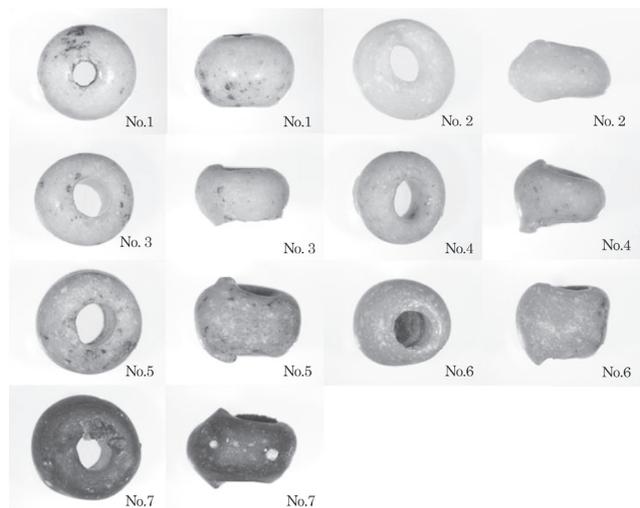


図2 表採資料の顕微鏡写真

<付 論>

今回、クラン・コー遺跡周辺で採集されたガラス小玉についても調査をおこなった。以下にその概要を述べる。

調査した資料は、黄色不透明を呈するガラス小玉4点 (No. 1～4)、淡青色不透明を呈するガラス小玉2点 (No. 5～6)、赤褐色透明を呈するガラス小玉1点 (No. 7) である。

製作技法はいずれも巻き付け法であると考えられる。ただし、No. 1以外は芯棒に軟化したガラス紐を1～2回巻き付けて成形され、表面の研磨はなされないのに対し、No. 1は少なくとも複数回巻き付けて成形され、表面を研磨して仕上げられている (図2)。

基礎ガラスの種類はいずれもカリ鉛ガラスであると推察される。ただし、保存状態が良好であるにもかかわらず、一般的なカリ鉛ガラスと比較すると K_2O 含有量が少ない傾向を示し、やや特異な組成を示すと言える。

黄色不透明を呈するガラス小玉 No.1-4 からは Sn が顕著に検出されたことや、No.2 についてラマン分光分析を実施したところ、 $PbSnO_3$ の特徴を示すスペクトルが得られたことから、着色因子は人工黄色顔料 $PbSnO_3$ であると考えられる。このような着色技法は Indo-Pacific Beads に紀元前から適用されている技法である。中国や日本で流通するカリ鉛ガラスにこのような着色技法を適用した例は知られていない。生産地の解明が課題となろう。

淡青色不透明を呈するガラス小玉 No.5、No.6 は銅イオンによって淡青色を呈するものと考えられる。ただし、上述の1号墓出土品と異なり Zn は検出されなかった。着色材として利用された銅原料が異なる可能性がある。また、これらのガラス小玉も CaO を2%前後含有する。カルシウム成分が不透明感に関与している可能性が考えられる。

赤褐色透明を呈するガラス小玉 No.7 は着色に関与する成分は極めて少ないものの、 CuO を0.35%含有する。金属銅コロイドによる着色の可能性はある。

これらのガラス小玉は上述の出土品と製作技法や基礎ガラスの種類は同じであるものの、大きさや形態、着色材の選択など異なる点も多い。製作された時期や場所、もしくはその両方が異なる可能性が考えられる。

2 金属製品

クラン・コー遺跡の発掘調査において鉄製小刀2点、青銅製と考えられる耳飾2点の合計4点の金属製品が出土している。地中から出土した金属製品は急激な環境変化により、発掘後に腐食が進行することがある。そこで、出土した金属製品は、乾燥状態で酸素に触れないように一時保管し、材質や状態に応じて更なる腐食が進行しないように適切な保存処理を施す必要がある。今回、クラン・コー遺跡出土金属製品について保存処理を実施した。以下、内容について報告する。

(1) 保存処理前調査

出土遺物を適切に保存処理するには、その材質や構造を調査し、現状を正確に把握する必要がある。今回、クラン・コー遺跡出土金属製品の保存処理に先立って、顕微鏡観察およびX線透過撮影を利用した内部構造調査、蛍光X線分析法による非破壊材質調査を実施した。ただし、本調査で実施した蛍光X線分析法は非破壊法であり、得られる知見は資料の腐食表面に関するものである。そのため、測定結果は資料に含まれる各成分の本来の含有量を示すものではない。

顕微鏡観察およびX線透過撮影の結果、小刀および耳飾のいずれにも進行性の腐食を示唆する腐食生成物は認められなかった。ただし、小刀の刃先部分や耳飾の表層部分は各所にX線の吸収が小さい箇所が存在し、脆弱化しているものと推察される(図3)。このことから強化処置を施すべきと判断した。なお、耳飾は断面円形の棒状の芯棒に紐状の金属を巻き付けて製作したように見える。

蛍光X線分析の結果、小刀2点からは主成分の鉄(Fe)以外に、珪素(Si)、チタン(Ti)が検出されたが、これらは表面に付着した土壌成分と考えられる(図4)。筒状金具部分についても同様の結果であった。

耳飾については、主成分は銅(Cu)である。ただし、錫(Sn)はほとんど検出されず、かわりに亜鉛(Zn)が検出された。また、芯部分と表面部分で検出される成分にわずかに違いが認められた。表面部分では微量の鉛(Pb)およびビスマス(Bi)が検出されたのに対し、芯部分では検出されなかった(図5)。

(2) 保存処理

① 小刀

観察の結果、安定な腐食生成物に覆われており、ハロゲン化物に起因する新たな腐食が進行する可能性は低いと考えられたため、安定な腐食生成物の層を破壊しないよう最低限のクリーニングとして、筆、竹串、メス、グラインダーなどを用いて表面に付着した土粒子を除去した。クリーニングが完了した後、強化処置として20%濃度のアクリルエマルジョン Paraloid NAD-10 を3回減圧含浸した。

② 耳飾

小刀と同様に、耳飾も表面が安定な腐食生成物に覆われており、新たな腐食が進行する可能性は低いと考えられたため、安定な腐食生成物の層を破壊しないよう最低限のクリーニングを実施した。銅および銅合金は鉄と比較して柔らかく傷がつきやすいため、クリーニングにグラインダーは使用しなかった。

銅および銅合金の新たな腐食を防止する方法としては、BTA(Benzotriazol)を用いた安定化処理が有効である。この方法は、内部に残存する新鮮な金属部分とBTAを反応させて安定な層を作ることによって腐食の進行を防止する方法である。今回は、クリーニング完了後にBTA 2%エチルアルコール溶液に24時間減圧含浸し、安定化を図った。

最後に強化処置として、5%濃度のアクリル樹脂 Paraloid B72 (アセトン・トルエン溶液) を2回減圧含浸した。

(3) 保管

金属製品は理想的には低湿度で酸素に触れないような環境下で保管することが望ましい。今回は特殊な不透過性フィルムで作られた袋に脱酸素剤を入れることにより相対湿度10%以下、酸素濃度0.1%以下を維持できるシステムを採用した。

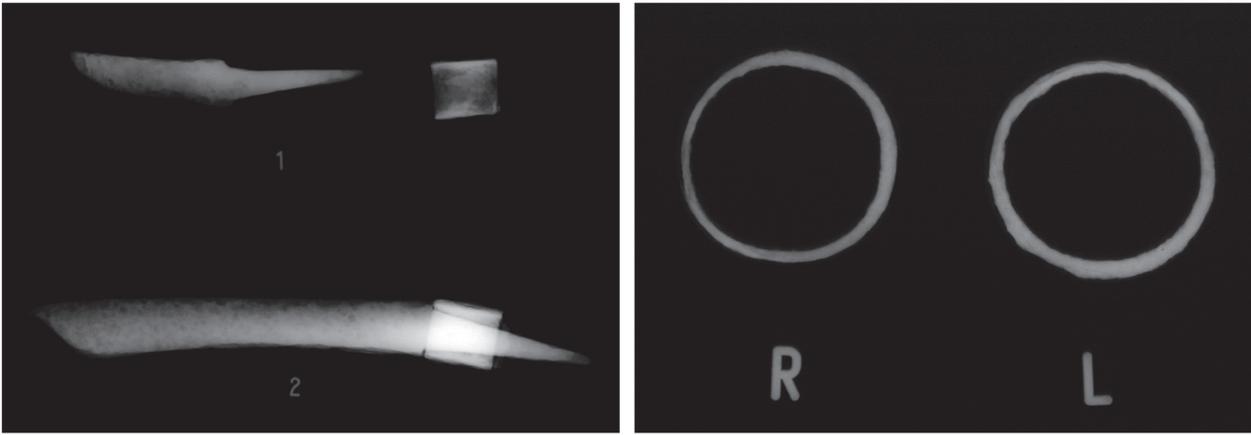


図3 1号墓出土遺物 X線透過画像 (左：小刀、右：耳飾り)

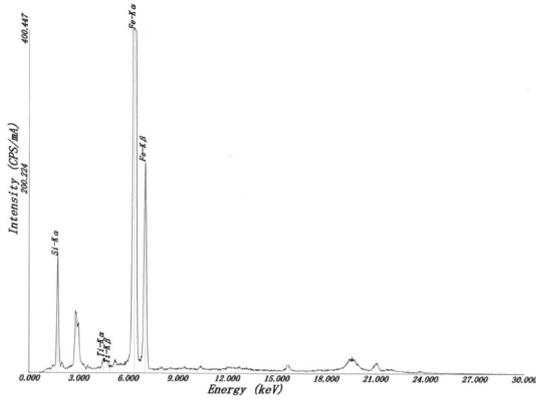


図4 小刀の蛍光X線スペクトル

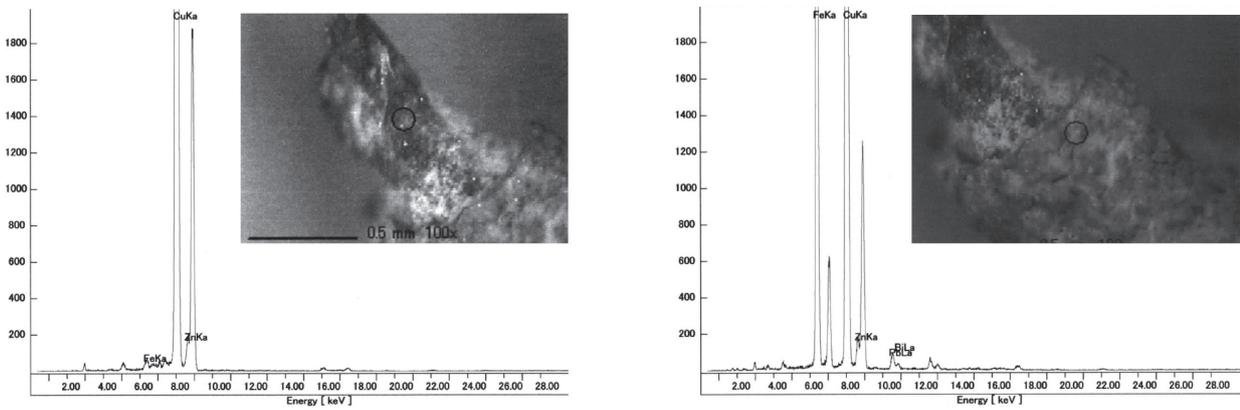


図5 耳飾りの蛍光X線スペクトル (左：芯部分、右：表層部分)

第3章 クラン・コー遺跡における探査成果

奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 金田 明大

はじめに

非破壊的に遺跡の情報を確認する探査手法は、遺構の配置などの詳細が不明な遺跡において、調査計画の策定や遺跡範囲の把握に寄与することが可能である。また、遺跡の保護においても、必要な情報を供給することができる。

クランコー遺跡の調査においては、周辺住民の資料の発見や盗掘、表面採集資料の存在により、地下に遺構が存在する可能性が高いと判断させるものの、既往の調査がなく、遺構の存在や配置などの情報が得られていないこと、地表面観察では遺構の痕跡を把握できないことから、物理的な手法に基づく探査技術の利用が有効と考えた。加えて、今後の遺跡調査や保護へのロールモデルとしてカンボジアの研究者に実践と講義を通じて探査技術の有効性を認識させることを目的として、2度の機会を得て探査を実施した。

ここでは、探査の方法と成果について概略を報告する。

探査期間は第一部第2節に詳細があるが、第1次調査の平成22年11月27日から12月4日まで、第3次調査の平成23年7月27日から8月9日までである。

探査手法

本調査では地中レーダー探査（GPR）をもちいた。アンテナより電磁波を地中に発信し、地中からの反射時間と強度を受信することによって異常部を知る方法である。電磁波は材質に差がある部分や地層の間といった物性の異なる部分の境界面に強く反射する。計測時間が短いこと、他の手法に比べて解像力が高いことから、日本における遺跡探査において成果をあげている方法である。アンテナの周波数の選択により、目的に応じて深さと解像力を変えることが可能である。今回は海外における調査ということもあり、持ち込みが可能な機材が限定された。機器はGSSI社製SIR-3000をもちいた。アンテナは中心周波数400MHz（30cm角）を使用した。探査区は任意の座標に基づき、長方形に設定した範囲内にメジャーを1～2m間隔ではり、基準とした。測線間隔0.5mである（図1）。解析はGPR-Slice（Dean Goodman氏作成）を用い、疑似的な断面（Profile）データよりTime-Slice法を用いて深さ毎の平面表示をおこなった。

第4地区の成果

第4地区では、作業効率のため、探査可能地区を2つの探査区に分けて探査をおこなった。深さは80nsまでである。

東区では、16×49mの長方形の探査区を設定した（図2）。Y=11mラインの点状の反射など、地表で確認できる施設に伴うもの以外に小さな反射が環状に存在する部分が調査区のY=1-31mの部分などで確認できる。地表観察では、大型の樹木の周囲にはたた土が高く盛り上がっている部分があり、環状の反射も同様の状況により形成されたものである可能性が高いと考えた。X=0-6m、Y=14-25mの27-58nsの深さには、平面円形の反射が存在するが、これは現生の木の根であると考えた。

西区では、15×50mの長方形の探査区を設定した（図3）。比較的浅い位置において点状の強い反射が存在し、13ns以深からは変わってX=2-15m、Y=20-40mに長方形の反射をとらえることができた。断面を加えて詳細をみると、何らかの構造物が存在する可能性が指摘できたため、調査区を設けて発掘をおこなった結果、これらの構造は蟻の巣であることが確認できた。



図1 探査作業風景

第6地区の成果

第6地区では、30×15mの長方形の探査区を設定した（図4）。深さは80nsまでである。ここでまず注目されるのは地表直下よりX=0-8m、Y=0-10m付近に存在する反射である。周辺にレンガが散乱することから、小規模な建築物などの存在が想定された。

また、X=23-30mには、弧状を呈する強い反射が存在する。溝あるいは土塁状の施設の可能性を想定したが、発掘調査の結果、土中のマンガンの集積による反射であることが明らかとなった。

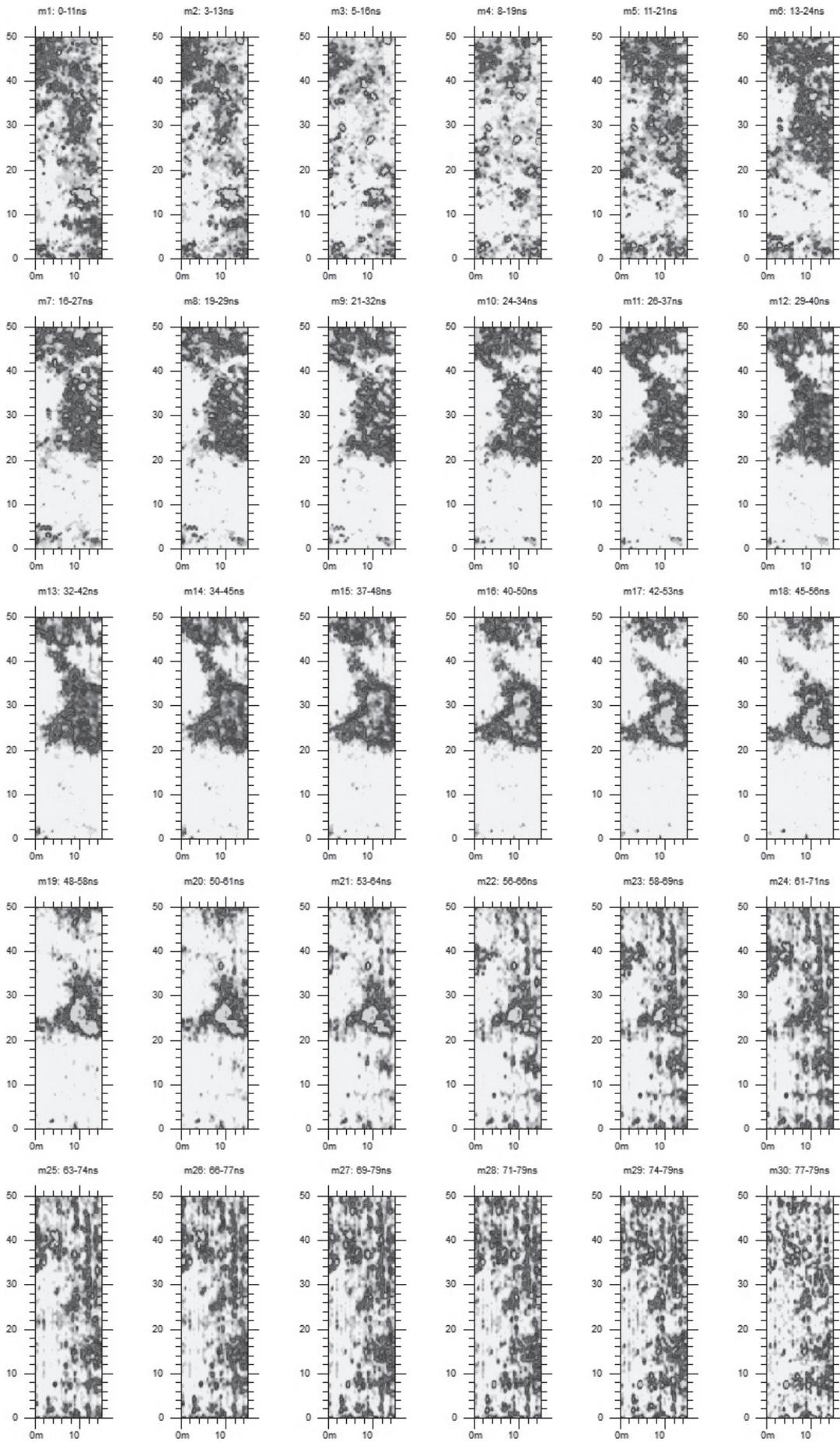


图2 第4地区东区GPR成果

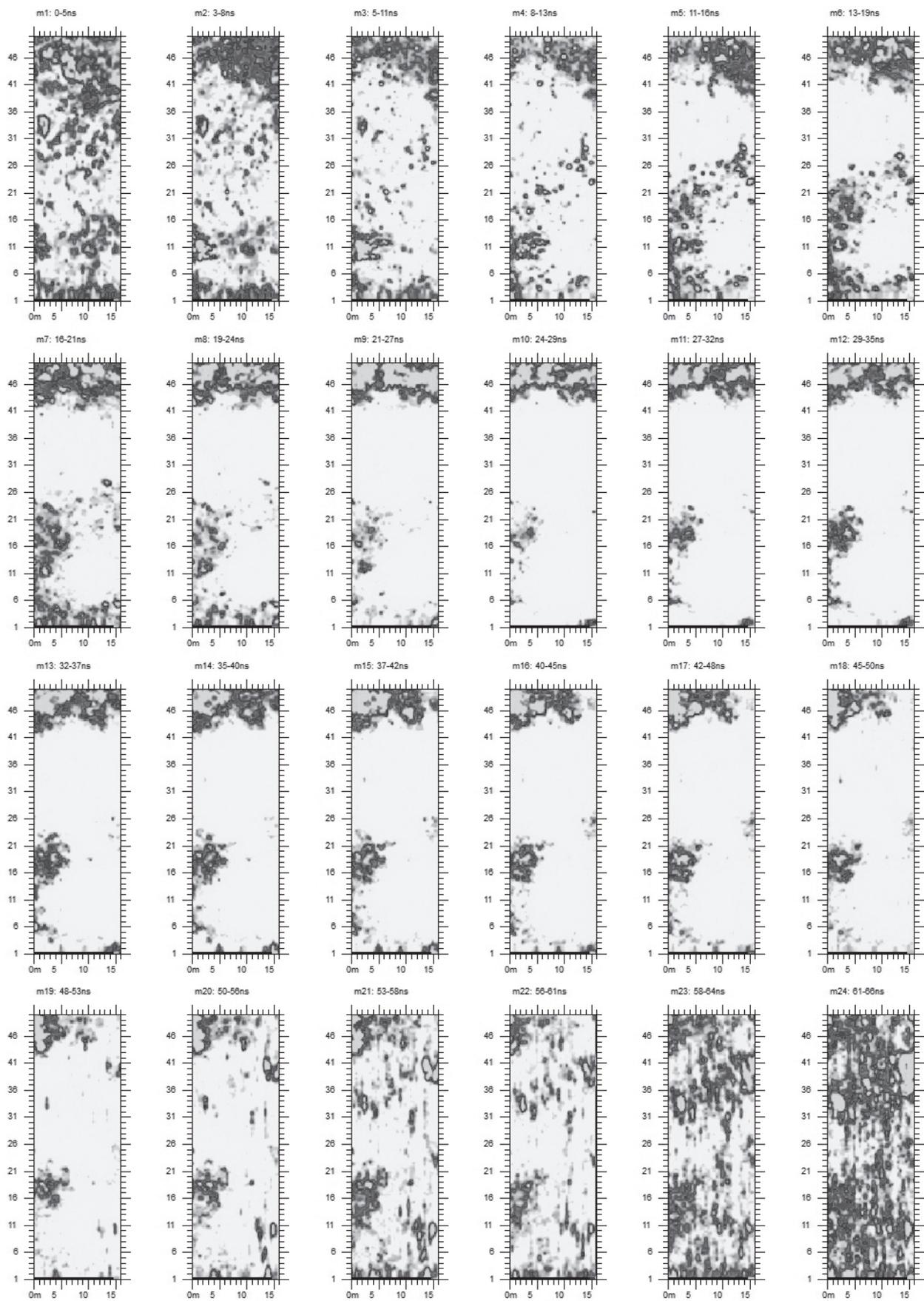


图3 第4地区西区GPR成果

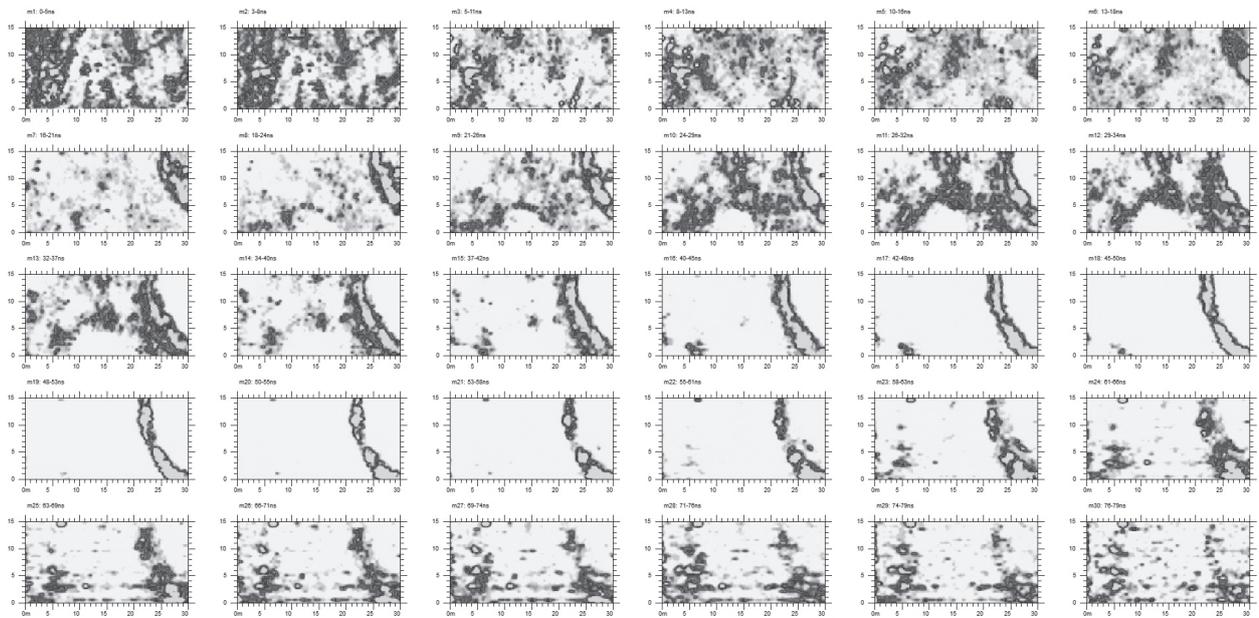


图4 第6地区 GPR 成果

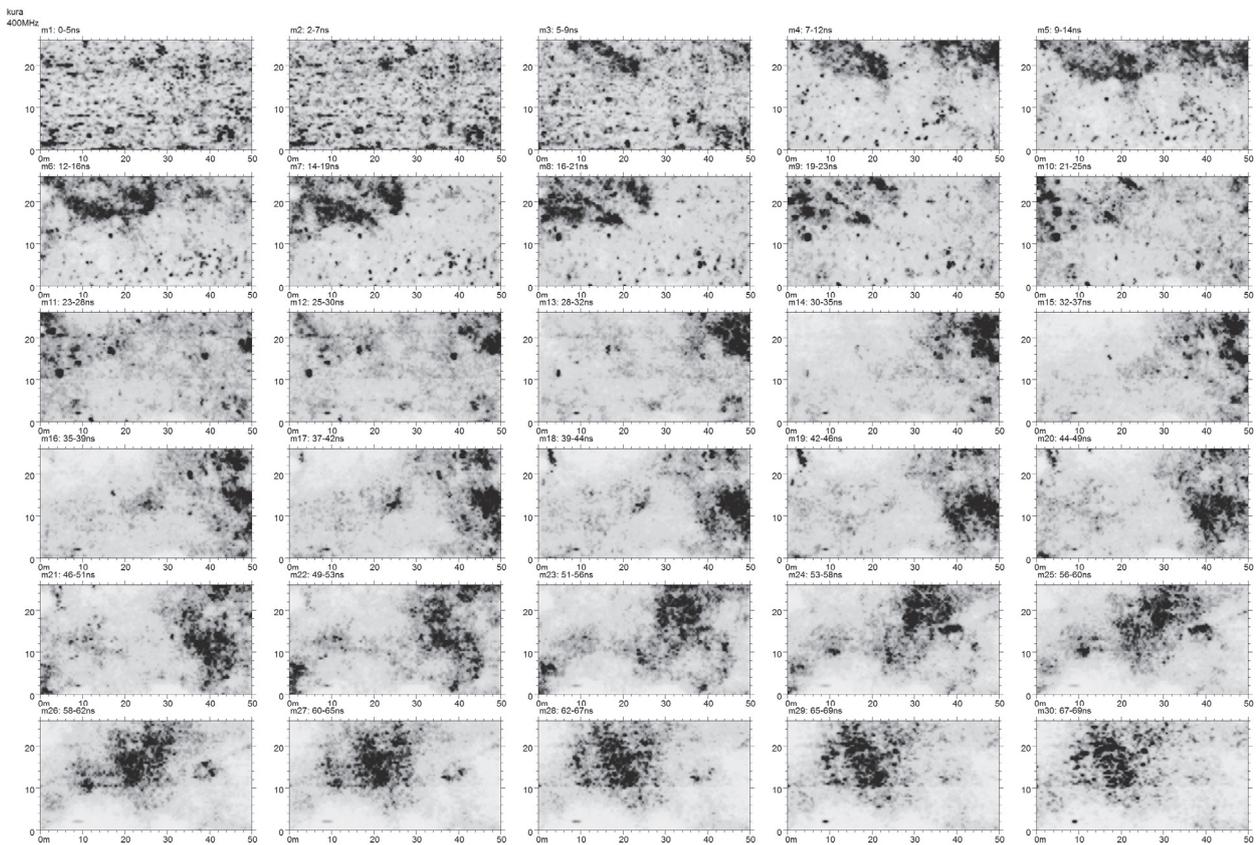


图5 学校地区 GPR 成果

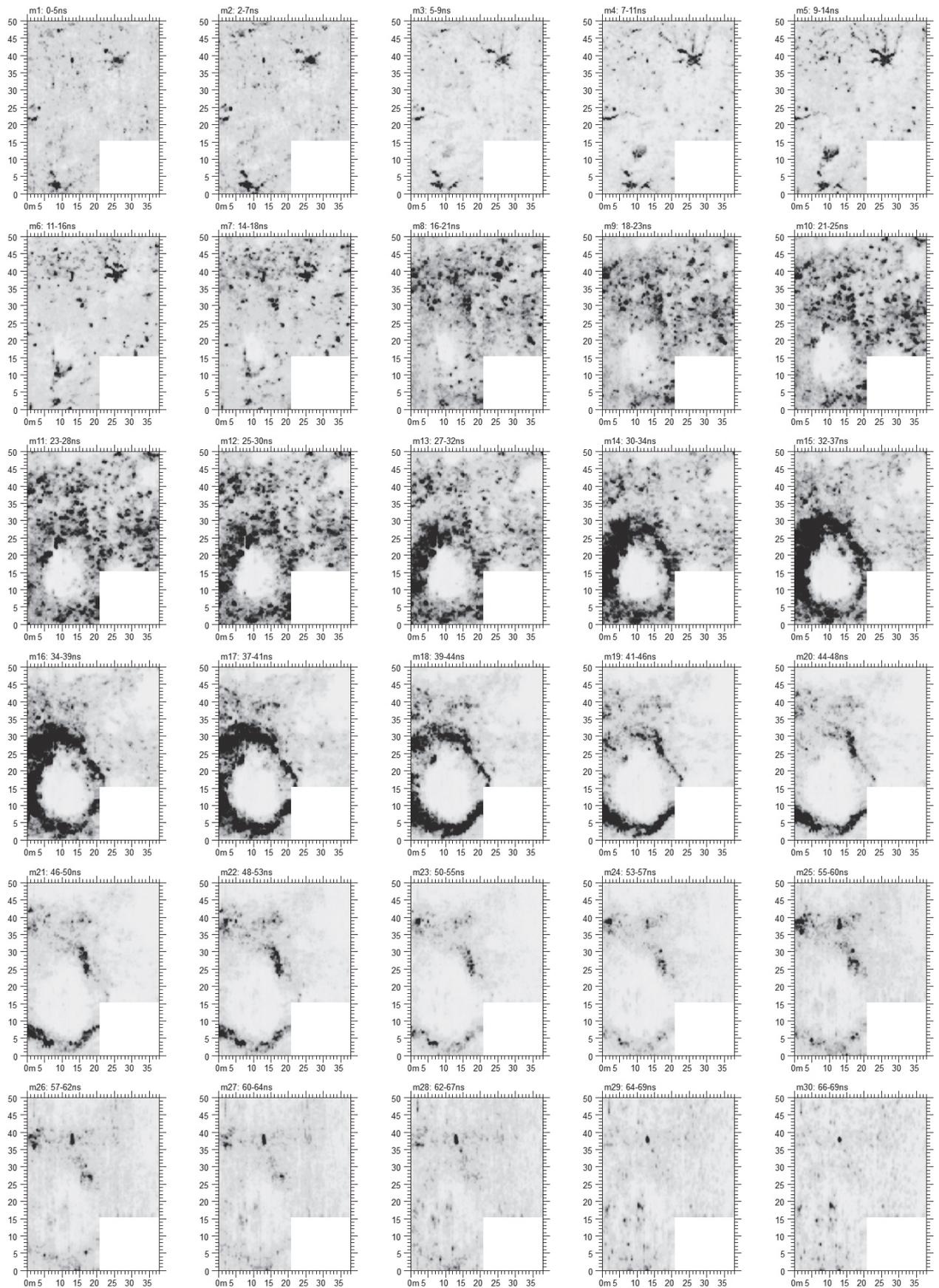


图6 5第7地区GPR成果

第7地区の成果

第7地区では、38×50mの探査区を設定した(図6)。一部は柵などのために探査ができなかった。深さは70nsまでである。

浅い位置から存在する反応は現生の樹木の根によるものが多い。調査区周辺は低湿な環境である部分が多く、凝集したマンガンの沈着が認められる箇所も多く存在する。第6地区の探査でも強い反射を有する部分がみられ、発掘調査の結果その原因のひとつとしてマンガンの集積によるものの可能性が高いと考えたが、これらの反射も同様に根周辺に集積したマンガン等の金属分によるものの可能性がある。

樹木の可能性が低いと考えた部分では、X=10 m、Y=11 m付近の点状の反射や、X=22-33 m、Y=20 m付近の点状の反射などがあり、これらの性格を確認することを目的に調査区を設定した。周辺では陶器類などの資料の採集が可能であることから、骨蔵器や副葬品としてこれらが用いられている可能性を想定し、発掘調査区を検討した。ひとつのトレンチからは炭化物が詰まった土坑を確認した。

学校地区の成果

学校地区は、50×25mの探査区を設定した。深さは70nsまでである(図5)。

学校側にあたる東側のY=15-25 mには、比較的浅いところから強い反射の部分が存在しているが、深さに応じてその分布が不規則に変化するため、明瞭な以降ではなく、地層の変化や地下水の分布、あるいはマンガンなどの集積によるものと考えた。

深さ23-30ns付近の1) X=4m、Y=12m付近、2) X=38m、Y=16m付近、3) X=9m、Y=14m付近、4) X=17m、Y=17m付近などの反射は上部からの反射ではなく、また断面では空洞を示すような反射も存在したため、骨蔵器などの可能性も指摘できた。そのうちの1) 2) の二つの地点についてAトレンチ、Bトレンチとして調査区を設定し、発掘をおこなった。このうち2) の地点では学校地区一号墓を確認することができた。

まとめ

今回の探査においては、日本で実施する探査とは対象物や土壌環境などが大きくことなり、地下の異常部についての正確についての蓄積がない状況での試行錯誤となった。しかし、発掘調査と連携することで、遺構だけではなく、蟻の巣や木の根、マンガンの集積による反射という当該地域における考慮すべき情報を蓄積できたことは、今後探査とその解釈をおこなう上で有効な情報を提供できた。また、学校地区一号墓の存在を結果として得られたことは、当該地域における探査技術の有効性をカンボジアの研究者と共に確認できたと考える。文末ではあるが、村人のみなさんや、調査に参加された各位にお礼を申し上げたい。

第4章 リビング・ヘリテージとしてのロンヴェーク遺跡

奈良文化財研究所企画調整部 石村智

ポスト・アンコール期の都城遺跡としてのロンヴェーク

ロンヴェーク遺跡をはじめとするポスト・アンコール期の都城遺跡は、他のカンボジア国内にあるクメール文明の遺跡に比べると、これまで注目される機会が少なかったことは否定できない。カンボジアの国家的なシンボルであるアンコール遺跡をはじめとする壮麗なモニュメントについてはこれまで学術的にも観光的にも注目を集めてきており、ユネスコ世界遺産にはアンコール期の遺跡であるアンコール遺跡とプレア・ヴィヒア遺跡の2件が登録されている。また世界遺産登録の準備を進めている「暫定リスト」に記載された物件は9件あるが、そのうちアンコール期のものが6件、プレ・アンコール期のものが2件なのに対し、ポスト・アンコール期のものはウドン遺跡の1件にとどまっている。

しかし一部の方面からは、この時期の遺跡に対する重要性の指摘がなされると同時に、その保護の必要性も指摘されるようになってきた。とりわけ内戦終結後から長年にわたってカンボジアで活動続ける奈良文化財研究所は、文化庁受託事業（文化遺産国際拠点交流事業）の一環として2010年よりカンボジア政府文化芸術省と協定書を交わし、ウドン遺跡およびロンヴェーク遺跡を中心としたポスト・アンコール期の都城遺跡の共同研究を開始したのである。

とりわけロンヴェーク遺跡においては、いくつかの地点において試掘調査を実施したのに加え、遺跡全体をくまなく踏査し、遺構の分布をマッピングするとともにその性質や保存状況などを記述した一覧表を作成した。こうした作業をおこなった理由は、いまだ詳細が明らかでなかったロンヴェーク遺跡の構造を解明するとともに、遺構の存在を特定することで、ゾーニングなどを含めた遺跡の保存管理計画を策定し、開発などによる破壊や毀損から遺構を保護するためである。

ロンヴェーク遺跡の調査をおこなうなかで気づいたことは、この遺跡をはじめとするポスト・アンコール期の都城遺跡の「地味さ」こそが、これらの遺跡の重要な特徴だということである。確かにポスト・アンコール期の遺跡には、アンコール期に見られた石造りの壮麗なモニュメントはほとんどなく、寺院や住居の基壇と考えられるマウンドや、都城を取り囲んでいた土塁や濠、さらには居住遺跡の痕跡を示唆する陶磁器片の散布地といったものが代表的な遺構であり、しかもそれらは現在の遺跡周辺の村落景観にほとんど埋没してしまっているため、認識するのが難しいものが多い。例えば、濠の遺構は空中から観察すると比較的明瞭に確認できるが（図1）、実際にはすでに埋没して水田に利用されるなどしていることが多く、地上からは判別が難しいことも多い（図2）。さらにロンヴェーク遺跡の調査中にも、一部の土塁やマウンドが道路の拡幅や土取りなどによって破壊を被っている事例が確認された（図3）。さらに遺跡の近傍ではレンガ工場が操業しており、そのための土取りも遺跡のすぐ近くでおこなわれていることも確認された（図4）。このように、開発などによる毀損から遺跡を守るためにも、基礎資料として遺構のマップおよび一覧表を作成することは不可欠なのである。

さらに、こうした作業を進める中で、ロンヴェーク遺跡に分布する遺構のすべてがただ単に破壊の危機にさらされているのではなく、そのうちのいくつかは地域住民の信仰のなかに取り込まれることによって守られているという事例を見出すことができた。次項ではそうした事例について見てみることにしたい。

ロンヴェーク遺跡における遺跡の転用

ロンヴェーク王都は1528年に建設され、1594年にシャム軍の攻撃で陥落するまでの間、カンボジアの王都として機能した。ロンヴェーク王都は東西3キロメートル、南北2キロメートルのやや歪んだ四辺形のプランをもち、中心にはワット・トロラエン・カエン寺院が創建され、そこには四方を向いた4体の仏立像と四対の石の仏足が祀られた（図5）のををはじめとして、108におよぶ寺院が都城の内外に設けられたと伝えられる（北川1998）。

しかし王城の陥落後、この地は現在にいたる農村的な景観へと戻っていったと考えられる。奈良文化財研究所と文化芸術省がおこなった現地調査では、108におよぶ寺院に相当するすべての遺構を確認することはできなかったが、数多くの寺院の遺構を確認することができた。そのうち、ワット・トロラエン・カエンやワット・プレア・アン・テープ（インドラ神の寺）などのようにロンヴェーク王都の時代に創建され、現在まで

存続している寺院がいくつかある一方で、かつての寺院の基壇跡を示すマウンドだけが残されていたり、のちの時代に新たな寺院として建て直されたりしたものも多いことがわかった。

そのうちロンヴェーク遺跡の南側に位置し、現在ヴィヒア・バツ・コーもしくはプレア・ヴィヒア・トゥオル・オン・キエサと呼ばれている寺院は、かつての寺院の基壇跡と考えられるマウンドの上部に、コンクリートとレンガを用いて新しい建物が建造中であった様子が確認された（図6）。さらにその寺院では、明らかに最近製作された仏像が祀られている中に混じって、ポスト・アンコール期もしくはアンコール期にまでさかのぼりうる石製の彫像が置かれているのが確認された（図7）。

またロンヴェーク遺跡中心部に位置し、現在ヴィヒア・コックと呼ばれる寺院も、やはりかつての寺院の基壇跡と考えられるマウンドの上部に、現在の木造茅葺の寺院の建物が建てられているが、マウンドの周辺には化粧割方（彫刻）が施された砂岩製の石材が散在しているのが確認された（図8）。これらの石材はポスト・アンコール期のロンヴェーク王都の時期にさかのぼるものと考えられ、かつてここに存在した寺院の基壇を構成した石材と想定される。すなわちかつての寺院が衰退もしくは廃絶した後、同じ場所に現在の小規模な寺院が建てられたと考えられる。

これらの事例は、かつての寺院が衰退もしくは廃絶した後も、同じ場所に引き続き寺院が建てられ、信仰が継続していることを示す事例といえる。そして一番目の事例のように、過去の遺物（彫像）を転用して、現在の祭祀の中に取り込んでいるという様相も興味深い。

過去の遺構・遺物を現在の信仰のなかに取り込んでいる事例は、こうした仏教（上座部仏教）の寺院だけではなく、民間信仰であるネアック・ターの祭祀においても認められる。ネアック・ターとはいわば土地の霊もしくは守護神であり、もともと仏教とは関係のない土着信仰であるが、実際には仏教やヒンドゥー教とも結びついて信じられている（Ang 1986）。例えば、アンコール遺跡の代表的なモニュメントであるアンコール・ワットにはいくつかのネアック・ターが存在するが、そのうちター・リエイと呼ばれるものはヴィシュヌ神を依代とし、アンコール地域では最強の霊力を持つネアック・ターとされる。ロンヴェーク遺跡の中にも数多くのネアック・ターが存在すると信じられており、中でもネアック・ター・クラン・ムアンと呼ばれるものが強力な霊力を持ち、幾度となくシャムからの侵略軍を撃退したと『王朝年代記』に記されている（北川 2006）。

今なおロンヴェーク遺跡にはいくつかのネアック・ターの祠堂が建てられており、それらの分布する場所はかつての都城の構造と何らかの関係があるかもしれない。例えばロンヴェーク遺跡北東部の、道路のために一部土塁が切通しとなっている箇所の上、ネアック・ター・アップ・パアンというネアック・ターの祠堂が建てられている（図9）。この切通しがロンヴェーク王都の時期まで遡るかは明らかでないが、もしその時期まで遡るとしたら、この場所は城門が設置された重要地点である可能性が高い。

またロンヴェーク遺跡北部の三叉路には、プラサット・プレア・ミエッターと呼ばれる上座部仏教の小祠堂とともに、牛の彫像を祀ったネアック・ター・プレア・コー・プレア・カエウが所在する（図10）。この三叉路もまたロンヴェーク王都の時期まで遡るかはわからないが、もしそうならばこれもまた都城の中の重要地点に位置していると考えられる。

ネアック・ターの祭祀においても、過去の遺構や遺物が転用されている事例を見出すことができる。例えばロンヴェーク遺跡東部に所在するツオル・クラパウ・ニ・ツンと呼ばれるネアック・ターの祠堂では、コンクリート製の基壇の上にワニに乗った人物の彫像が祀られている。ここには砂岩製のシーマ石が置かれているのが確認された（図11）。シーマ石とは上座部仏教の寺院に設置されるもので、境内の内と外の境界に置かれる結界石である。このシーマ石は、その様式からポスト・アンコール期にさかのぼるものと推定される。こうした状況から、おそらくこのネアック・ターの祠堂の周辺には廃絶した仏教寺院が存在し、そこから掘り出されたものがここで祀られているものと考えられる。

またロンヴェーク遺跡北東部に所在するワット・ソトピー・レアンサイ寺院の境内にはいくつかのネアック・ターの祠堂が確認されたが、そのうちのひとつの中にはポスト・アンコール期もしくはアンコール期にさかのぼると考えられるいくつかの仏像と考えられる彫像の破片が納められていることが確認された（図12）。これもすでに廃絶した仏教寺院に祀られていた仏像が、現在のネアック・ター信仰の祭祀の中に転用されている事例といえよう。このようにロンヴェーク遺跡では、過去の遺構や遺物が今日の仏教およびネアック・ターの信仰に転用されること

で残されているという様相が確認された。これはある意味で、文化遺産保護の一形態といえるかもしれない。しかしそれは専門家による学術的・技術的な意味での文化遺産保護ではなく、地域社会のローカルな論理のなかでの文化遺産保護ということができるだろう。

こうした文化遺産保護の形態は必ずしも信仰面に関わるものに特有というわけではない。すでに指摘したように、都城の濠の大部分はすでに埋められ、水田として利用されているが、その土地区画のあり方はかつての都城の構造を反映したものであり、今日なお空中から観察することによってその存在を確認することができる。もし今後、圃場整備などの区画整理がおこなわれることなく、現在の土地利用が踏襲されつづけるならば、こうした都城の痕跡も残され続けることだろう。

リビング・ヘリテージとしてのロンヴェーク遺跡

最近、リビング・ヘリテージという言葉が広く用いられるようになった。それには様々な定義があるが、今日なお遺産を受け継ぐ人たちがそこにおり、継続的に使用されているものを「生きている遺産」すなわちリビング・ヘリテージというのにふさわしいだろう。

リビング・ヘリテージの概念を考える上で重要なのが、1904年にスペインのマドリッドにおいて開催された第6回国際建築家会議で採択された「記念的建造物の保存と修復」憲章である。このなかで、「死んだ記念物」と「生きた記念物」という概念が示され、それらの保存と修復について次のような方針が示された。

死んだ記念物は、破壊から防止するために不可欠な補強だけをおこなうことによって保存すべきである。何故ならば、こうした記念物の重要性は記念物自体とともに消え去るその歴史的かつ技術的価値にあるからである。生きた記念物は、利用され続けるために修復されなければならない。何故ならば、建築の有用性が美の基盤のひとつであるからである。

こうした概念を引用するなら、今ある村落景観に埋没しつつも、多くの都城の遺構が転用・上書きされながら使い続けられるというロンヴェーク遺跡は、「死んだ遺産」よりも「生きた遺産」、すなわちリビング・ヘリテージとしてとらえるのがより適当であると考えられる。

ロンヴェーク遺跡のようなタイプの文化遺産を守っていくには、国や政府がそれを文化財として指定し、行政的に保護・管理していくだけではなく、そこに暮らす住民たちが継続してきた信仰や土地利用のあり方をリビング・ヘリテージとして尊重し、それを利活用していくというのが有効と考える。つまり、ロンヴェーク遺跡をすでに廃絶した過去の王城の痕跡としてとらえるだけではなく、現在も継続して生きる遺産としてとらえ、過去の景観が現在の景観に「記憶」されているととらえるべきである。その上で、住民たちによる信仰や土地利用も、その遺産を構成する一要素とみなすというアプローチが有効と考えるのだ。

現在、すでに暫定リストに記載されているウドン遺跡とともに、ロンヴェーク遺跡などのポスト・アンコール期の王城を文化遺産として保護していく取り組みが文化芸術省を中心に進められており、奈良文化財研究所も引き続きその事業に協力していく予定である。そのなかで、リビング・ヘリテージの概念をカギに、その地域住民も重要な利害関係者（ステークホルダー）として巻き込みながら、遺産マネジメントの仕組みを作り上げることが望ましいと考える。

北川香子 1998 「ポスト・アンコールの王城：ロンヴェークおよびウドン調査報告」『東南アジア：歴史と文化』
27

北川香子 2006 『カンボジア史再考』 連合出版

Ang C. 1986 *Les êtres surnaturels dans la region populaire khmère*. Paris: Cedoreck.



図1 空中から見たロンヴェーク遺跡の様子



図2 地上から見たロンヴェーク遺跡の濠の様子。水田に変わってるのがよくわかる。



図3 道路の拡幅のために一部が重機で削られてしまった土塁の遺構。



図4 遺跡のすぐ近くで行われている土取り作業の現場



図5 ワット・トラエン・カエン寺院（左）と、その内部に祀られた仏足のひとつ（右）。



図6 ヴィヒア・バツ・コー寺院の建造中の建物



図7 ヴィヒア・バツ・コー寺院に祀られたポスト・アンコール期以前の彫像



図8 ヴィヒア・コック寺院の現在の建物（奥）と、
ポスト・アンコール期の基壇の外装石材（手前）



図9 ネアック・ター・アップ・パンの祠堂



図10 プラサット・プレア・ミエッターの小祠堂（左）
およびネアック・ター・プレア・コー・プレア・カエ
ウの牛の彫像（右）



図11 トゥオル・クラパウ・ニ・ツンの祠堂とシーマ
石（結界石）



図12 ワット・ソトピー・レアンサイ寺院のネアック・ターの祠堂（左）と、その内部に祀られたポスト・アンコー
ル期以前の彫像（右）

2015年3月31日発行 発行/印刷

ポスト・アンコール期遺跡に関する
研究報告書

著作権所有 奈良市佐紀町 247-1
発行者 独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所

印刷者 アイプリコム